

史跡 齋宮 跡

令和元年度発掘調査概報

2021年3月

齋宮歴史博物館



第197次調査区全景（南西から）



飛鳥時代の重複する四脚門（北西から）

序

令和2年は、昭和45年に始まった齋宮跡の発掘調査が50年を迎え、史跡齋宮跡にとって節目の年になりました。50年間発掘調査を絶え間なく続けることができましたのも、地域の皆様のご理解・ご協力があったからこそと改めて感謝いたします。

さて、今回報告する第197次発掘調査は、齋宮の成立にかかる実態を解明するため、史跡西部の中垣内地区で行ったものです。調査の結果、従来から大きな課題とされていた、飛鳥時代後期の掘立柱塀による区画内の構造の把握について大きな成果をあげる事ができました。これは今後、飛鳥時代の齋宮を考えるため、また、周囲の発掘調査方針を考えるための大きな成果とも言えます。この調査で得られた成果は、地元明和町をはじめ、ひろく県民の皆様や齋宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

今後も齋宮歴史博物館は、全国で唯一無二の遺跡である齋宮跡を体感できるサイトミュージアムとして、いっそう魅力ある活動を続けてまいります。

史跡齋宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、齋宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡齋宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2021（令和3）年3月

齋宮歴史博物館
館長 上村 一 弥

例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が令和元年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第197次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第196次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第VI座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器分類と年代観については、一部を除き以下の文献に拠った。
・斎宮歴史博物館2018「斎宮跡の土器編年の再検討」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』
- 5 斎宮跡の時期区分については土器編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記するが、本文中ではこれを簡略的に「斎宮Ⅱ-1期」と表現している。
- 6 遺構表示記号は、文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき—集落遺跡発掘編—』に準拠し、遺構の種類から次のように表記している。
SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物・門 SI：竪穴建物 SD：溝 SK：土坑 SZ：周溝墓
- 7 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っている。遺物写真は縮尺不同である。
- 8 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第5版（1989年）を用いて補っている。
- 9 遺物の漢字表現は、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「碗」、「つき」は「杯」を用いる。ただし、参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。
- 10 発掘調査にあたっては、以下の方々のご指導、ご協力を賜った。
篠原祐一・田村陽一・箱崎和久・林部 均（五十音順 敬称略）
- 11 本書の執筆は山中由紀子が、遺物写真の撮影は大川勝宏があたり、編集は調査研究課で行った。また、発掘調査は山中が担当し、現地調査及び資料整理については、大川・川部浩司・宮原佑治・八木光代・森本周子・中西宏美が補佐した。

目次

I 前言	1
II 第197次調査	7

挿図目次

第I-1図	史跡斎宮跡位置図	4
第I-2図	令和元年度発掘調査位置図	5
第I-3図	史跡斎宮跡における大地区表示図	6
第II-1図	第197次調査 グリッド図	8
第II-2図	第197次調査 遺構平面図	8
第II-3図	第197次調査 調査区土層断面図	9
第II-4図	第197次調査と既往調査遺構平面図	10
第II-5図	第197次調査 弥生時代遺構分布図	11
第II-6図	S Z 11303 土器出土状況平面・立面図	12
第II-7図	S K 11326 土器出土状況平面・立面図	12
第II-8図	S K 11329 見通し断面図	12
第II-9図	第197次調査 古墳時代遺構分布図	13
第II-10図	S A 11310 平面・土層断面図	14
第II-11図	S B 11320・11330 平面・土層断面図	15
第II-12図	S B 11110 平面・土層断面図	16
第II-13図	S B 11339・11340 平面・土層断面図	17
第II-14図	S D 11106・11107・11323・11324 平面・土層断面図	18
第II-15図	「白色粘土」確認箇所土層断面図	20
第II-16図	調査区南東部の掘立柱群 平面・土層断面図	21
第II-17図	S B 11342・11345 平面・土層断面図	22
第II-18図	S D 11337・S K 11331、S D 11101 平面・土層断面図	23
第II-19図	第197次調査 出土遺物実測図1<遺構>	27
第II-20図	第197次調査 出土遺物実測図2<遺構>	28
第II-21図	第197次調査 出土遺物実測図3<包含層>	30
第II-22図	第197次調査 出土遺物実測図4<包含層その他>	31
第II-23図	飛鳥時代の遺構変遷図	35

表 目 次

第Ⅰ-1表	令和元年度史跡富宮跡の現状変更等許可申請一覧	3
第Ⅰ-2表	令和元年度発掘調査一覧	3
第Ⅱ-1表	第197次調査 遺構一覧1	24
第Ⅱ-2表	第197次調査 遺構一覧2	25
第Ⅱ-3表	第197次調査 掘立柱扉・門・掘立柱建物一覧	25
第Ⅱ-4表	第197次調査 遺物観察表1	36
第Ⅱ-5表	第197次調査 遺物観察表2	37
第Ⅱ-6表	第197次調査 遺物観察表3	38

写 真 図 版 目 次

巻頭図版	第197次調査区全景／飛鳥時代の重複する四脚門	
写真図版1	調査区遠景／調査区全景	39
写真図版2	S A 11310／S B 11110 柱穴2 柱抜取穴検出状況	40
写真図版3	S D 11107／S D 11107 柱穴2 断面／S D 11323／S D 11323 断面／ S D 11297・S B 11320 柱穴断面／調査区南東部 奈良時代掘立柱柵群	41
写真図版4	第197次調査 出土遺物	42

I 前 言

1 調査の経緯と概要

史跡齋宮跡にかかる経緯と経過

齋宮跡の発見の契機は、高度経済成長期に齋宮段丘面の西縁部で大規模な宅地造成計画が立てられ、その開発事業に先立って実施された昭和45年の古里遺跡の確認調査による。大型の建物を含む多くの掘立柱建物、井戸、土坑、奈良時代と鎌倉時代の大溝、踏脚礎や大型赤彩土馬、緑釉陶器などが発見され、齋宮関連の重要遺跡と認識された。昭和48年度から文化庁の補助事業として確認調査を重ね、東西2km、南北700mに及ぶ137haの史跡範囲が把握されるに至り、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。管理団体は明和町である。

三重県は、史跡指定に伴い齋宮跡調査事務所を設置して、平成元年度からは新たに開館した齋宮歴史博物館によって、主に史跡の内容確認のための計画的な学術調査を継続的に実施している。

これまでの発掘調査では、史跡東部に所在する方格街区（地割）と平安時代の齋宮中核部について具体的な解明が進んだ。平成27年度には柳原区画で平安時代前期の齋宮寮庁（正殿・西脇殿・東脇殿）を対象に、史跡整備の一環として復元建物を建設し、史跡公園「さいくう平安の杜」として公開活用している。

明和町では「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取り組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画に基づいて、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画し、平成24年度に発掘調査を行い、平成27年度から工事に着手、平成29年3月に「いつきのみや地域交流センター」が竣工した。また、平成27年4月24日には「祈る皇女齋王のみやこ齋宮」が日本遺産に認定されている。

史跡齋宮跡の発掘調査

昭和45年の確認調査（第1次）を皮切りに、史跡内容確認の計画的な学術調査、現状変更等に伴う調

査が積み重ねられ、令和元年度の調査で49年目を迎えた。これまでは史跡東部の平安時代齋宮にかかる方格街区内部の発掘調査に重点を置き、具体的な構造の解明に取り組んできた。これらの成果を毎年、発掘調査概報としてまとめているが、齋王の宮殿「内院」、柳原区画の「齋宮寮庁」、下園東区画の「寮東」については正式な発掘調査報告書を刊行している。今後は「飛鳥時代～奈良時代齋宮」等にかかる発掘調査報告書も順次刊行していく方針である。

齋宮歴史博物館は平成29年3月、史跡齋宮跡発掘調査の考え方や調査計画をまとめた『史跡齋宮跡発掘調査基本方針』を策定した。その中では、史跡内容確認の重点項目として、初現期（飛鳥～奈良時代）の齋宮の実態解明、方格街区内部構造の解明、衰退期（平安～鎌倉時代）の齋宮の実態解明、齋宮に関わる居住、生産・流通、墓域等の解明の4項目を課題に挙げた。そして当面の重点目標として、史跡西部での飛鳥～奈良時代齋宮中核部の実態解明調査を掲げている。特に史跡西部の中でも中垣内地区は、古代伊勢道が北側にわずかに湾曲する部分を含み、古代伊勢道が敷設される以前の重要施設が集中していたと想定され、これまで飛鳥時代の掘立柱塼と想定される柱列1列を中心に、平面方位で北から東に約33°の傾きをもつ多数の建物跡を確認している。さらに奈良時代になると、平面方位を正方位へと変えた掘立柱塼による方形区画が確立しており、奈良時代齋宮の中核施設も配置された重要地区である。

方針策定後の初年度となる平成29年度第192次調査では、台地平坦面の西端部に平成2年度第85～8次調査で確認されていた飛鳥時代の掘立柱塼となる1列の柱列が、方形区画として西側に配置されている可能性を想定して調査を行なった結果、当該期に関連する遺構が極めて希薄であることが明らかとなった。これを受けて平成30年度は、第193次調査において掘立柱塼による方形区画の北東角を確認し、区画内部に掘立柱塼と方向を同じくする掘立柱建物を確認、また第195次調査において方形区画の西側に複数回の建て替えを伴う総柱建物群を確認するこ

とができた。これらの成果を受けて令和元年度は、さらに区画内部の構造を明らかにすることを目的として第197次調査を実施した。調査期間は令和元年9月2日～令和2年3月23日、調査面積は425.8㎡であった。

発掘調査現場の公開活用

齋宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上のために、発掘調査現場の積極的な公開活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や「子ども1日体験発掘教室」を開催している。

第197次調査の随時公開の見学者はのべ890名、特別展に伴う現場公開（令和元年11月3日）は53名、現地説明会（令和2年1月26日（日）10時30分～12時、13時～15時）は174名、子ども1日体験発掘教室（令和元年10月5・6日）は19名であった。

2 調査体制

史跡齋宮跡の調査研究・整備活用に関する業務は、齋宮歴史博物館調査研究課が担当した。当該報告に関わる組織は以下の体制で行った。

<第197次調査>

・令和元年度

大川勝宏（課長）
山中由紀子（主幹（課長代理））
川部浩司（主査）
宮原佑治（主任）

・令和2年度

大川勝宏（副参事兼課長）
山中由紀子（主幹兼課長代理）
川部浩司（主査）
宮原佑治（主任）

3 齋宮跡調査研究指導委員会

齋宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、令和2年1月10日に齋宮跡調査研究指導委員会議を開催し、第197次調査の調査成果や明和町の整備事業について指導及び助言を得た。指導委員の方々は次のとおりである。

[指導委員]

浅野 聡（三重大学大学院准教授）
稲葉信子（筑波大学大学院教授）
小澤 毅（三重大学教授）
京楽真帆子（滋賀県立大学教授）
金田章裕（京都大学名誉教授）
黒田龍二（神戸大学大学院教授）
増淵 徹（京都橋大学教授）
松村恵司（奈良文化財研究所長）
本橋裕美（愛知県立大学准教授）
渡辺 寛（皇学館大学名誉教授）
綿貫友子（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

4 令和元年度発掘調査一覧

文化財保護法第125条第1項の規定による史跡現状変更等許可申請は、令和元年度に41件（国許可22件、県許可19件）があった。このうち、当該許可申請の許可条件に基づく史跡齋宮跡の発掘調査及び立

会を要した案件については、その内訳を第1-1表、発掘調査を実施した内容は第1-2表にまとめた。

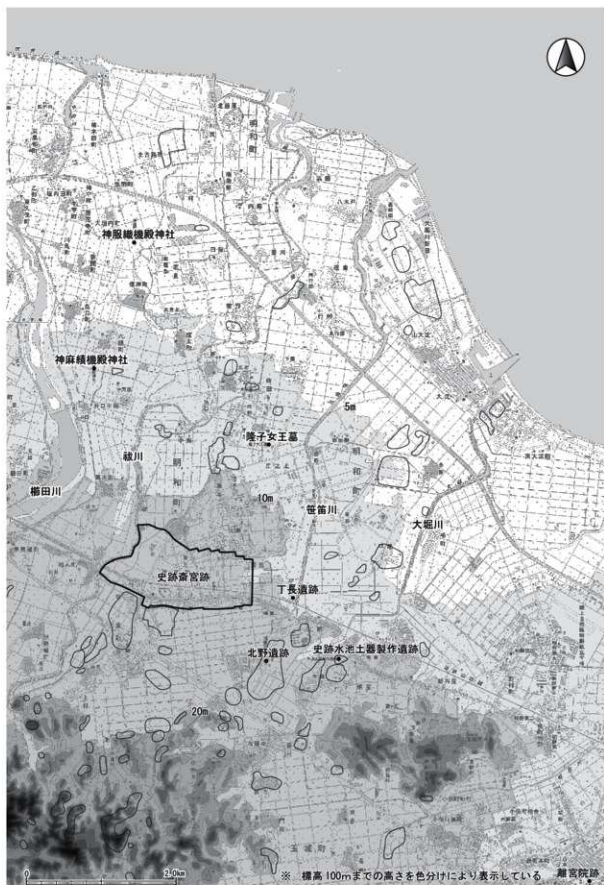
明和町主体の第196次調査については、『史跡齋宮跡 令和元年度 現状変更緊急発掘調査報告』として、令和2年12月に明和町が刊行している。

現状変更等許可申請の内容	申請及び許可件数	対応別件数
個人・民間企業による申請	21	発掘調査 4、立会い 17
明和町による地域環境整備に伴う申請	1	立会い 1
明和町等による史跡環境整備及び維持管理に伴う申請	4	立会い 4
三重県による計画的発掘調査のための申請	1	発掘調査 1

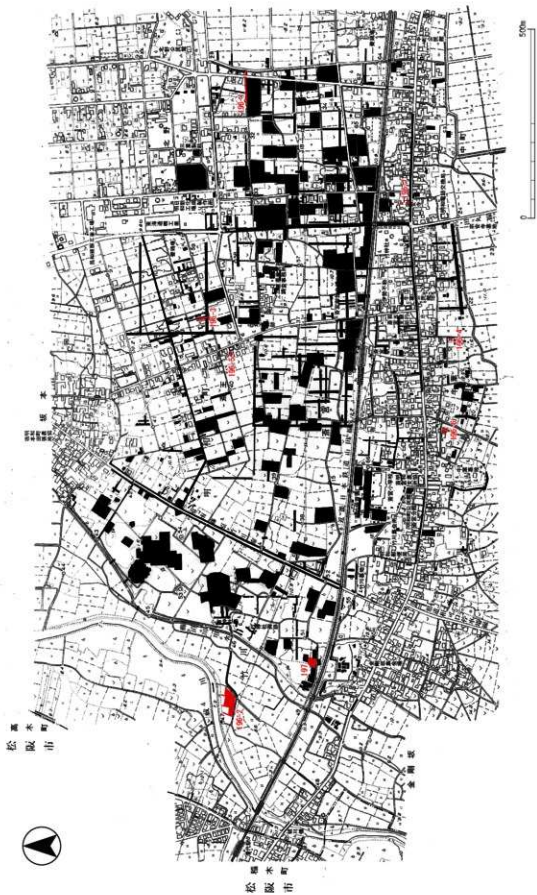
第1-1表 令和元年度史跡齋宮跡の現状変更等許可申請一覧

調査次数	地区	調査面積 (m)	調査期間	調査場所	現状変更申請者	現状変更申請理由	保存管理の土地利用区分
197	G10	425.8	R1.9.2～R2.3.23	明和町大字竹川字中垣内	三重県	計画発掘調査	第二種保存地区
196-1	U7, V7	328.0	H31.4.15～R1.7.17	明和町大字齋宮字東加座、東前沖	明和町	排水路改修	第一・二・三種保存地区
196-2	E7, F7, E8, F8	1330.0	R1.5.13～17・24 (確認調査) 7.22～11.14(本調査)	明和町大字竹川字級戸	明和町	史跡整備	第三種保存地区
196-3	P7	105.5	R1.5.16～6.7	明和町大字齋宮字楽殿	個人	造成・盛土	第三種保存地区
196-4	O14	22.2	R1.8.19～21, 12.9	明和町大字齋宮字木薬山	個人	住宅改築	第四種保存地区
196-5	O8	103.3	R1.10.4～17	明和町大字齋宮字雑林	個人	住宅建築	第四種保存地区
196-6	N11	44.0	R1.11.13～26	明和町大字齋宮字木薬山	個人	住宅建築	第三種保存地区
196-7	S12	74.3	R1.11.28～12.17	明和町大字齋宮字中西	個人	住宅建築	第三種保存地区

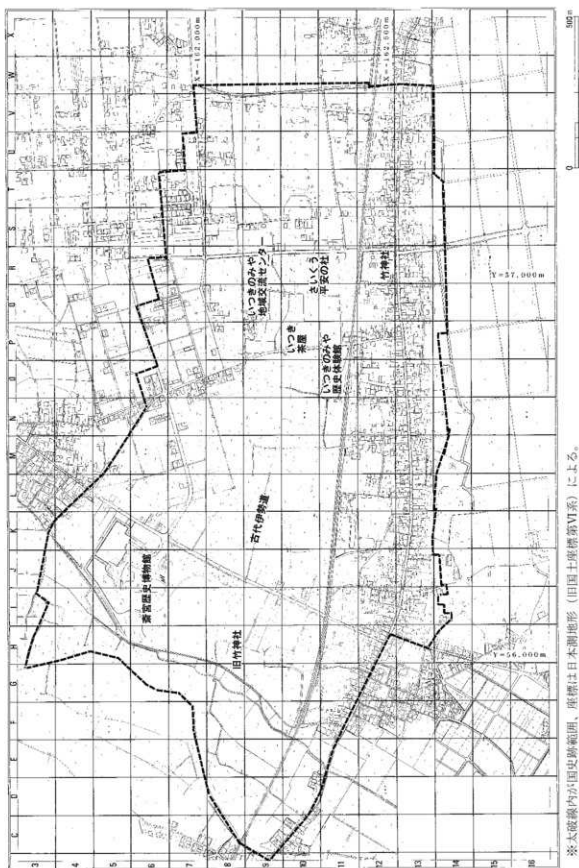
第1-2表 令和元年度発掘調査一覧



第1-1図 史跡斎宮跡位置図 (1:500,000・国土地理院1/25,000「松阪」明野を改変)



第1-2図 令和元年度発掘調査位置図(1:10,000)



※太波線内が国史跡範囲、座標は日本測地形（旧国土庁標第VI系）による。

第1-3図 史跡齋宮跡における大地区表示図（2002年策定）

Ⅱ 第197次調査 (6AG10 中垣内地区)

1 はじめに

史跡西部の段丘緑地には、古代伊勢道を基点として南北へ派生する道路沿いに飛鳥～奈良時代の掘立柱建物・竪穴建物の分布が確認されている。特に古代伊勢道の南では、掘立柱建で方形に区画された空間が複数箇所確認され、これらは平安時代に方格街区が敷設される以前の斎宮中核域と想定している。

飛鳥時代は、古代伊勢道から南へ派生する直線道路の敷設軸に合わせた方位の掘立柱建による方形区画が確認されている。第193次調査で方形区画の北東角が確認され、第189次調査までの延伸部分を東辺、第85-8次調査で確認した掘立柱建をその西辺とした方形区画の配置が明らかとなった。方形区画はN33°Eの方位をとり、東西幅約41m、南北幅55m以上の規模をもつ。区画内部は第193次調査で確認された長倉を含む掘立柱建物群が整然と配置されているものと予想される。また、方形区画の西側、段丘緑には第195次調査において複数回の建替えを伴う総柱建物群を確認しており、方形区画に伴う倉院と位置付けられている。

奈良時代には、正方位の配置で掘立柱建をめぐらす方形区画が整備される。方形区画の平面規模は南北約57mを測るが、ほぼ同一の地点で2～3回の建替えが確認されている。配置をみると方形区画が東西に併存、あるいは交互に変遷を重ねている。

第197次調査地は、史跡西部の中垣内地区に所在する。斎宮段丘面（段丘中位面）の段丘崖から東へ約90mの地点に位置し、発掘調査前は畑地として土地利用されている。

調査地は第193次調査地のすぐ南で、飛鳥時代の方形区画内の構造確認を目的として調査を実施した。

2 地形環境と地層

史跡斎宮跡は、紀伊山地に端を発する橿田川（蔵川）・富川の下流域に挟まれた明野原台地の西方に位置する。後背の玉城丘陵・大仏山丘陵を基点として、そこから北へ段丘高位面（明野段丘面）、段丘中位面

（斎宮段丘面）の順に地形は下降し、東西に広がる沖積低地（海岸平野・氾濫平野・三角州・後背低地）を介して、伊勢湾へと連なる。史跡斎宮跡は、段丘中位面（斎宮段丘面）に立地し、史跡西城の段丘南西部を最高所（標高約14.5m）として、全体に東北東に向けて緩やかに下へ傾斜する。史跡の東域では標高9m程度となり、傾斜角度は1°にも達しないほどの平坦な地盤を形成している。

第197次調査地は段丘西縁に位置し、現況が畑地の平坦面で、約14mの標高を測る。

基本層序は上から、耕作土、客土、遺物包含層、地山からなり、地山面までの深度は北端で0.7m、南端で0.45m、西端で0.55m、東端で0.5mを測る。遺構の大半は遺物包含層の上面から掘り込んでいる。遺物包含層と遺構土の碎屑物構成・色調が似ており、当該面での遺構検出は困難のため、地山直上で行って誤認を回避するよう努めた。

3 遺構

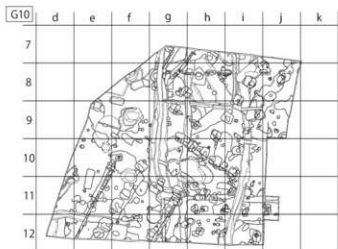
調査の結果、弥生・古墳・飛鳥・奈良時代、平安～鎌倉時代、近世の各種遺構を検出した。以下、検出遺構について時代毎に概観するが、遺構の全体・詳細は第Ⅱ-1・2表にまとめている。

(1) 弥生時代

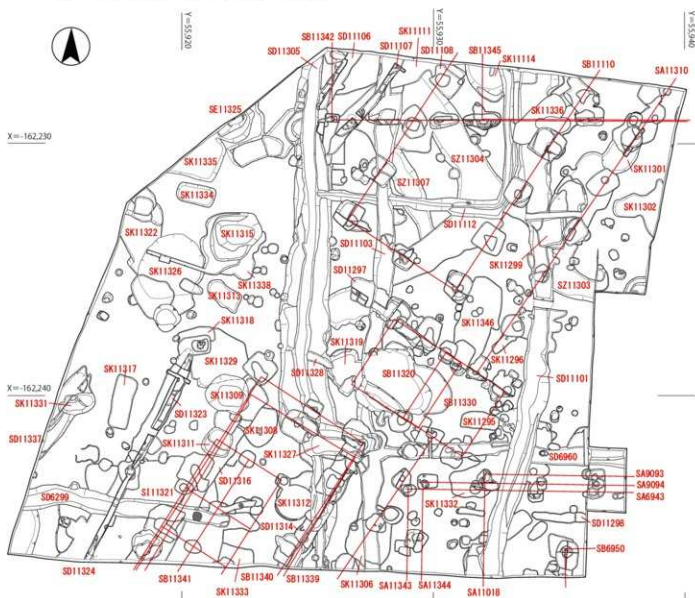
弥生時代中期中葉の方形周溝墓2基・土坑9基を確認した。

S Z 11304 調査区の北部中央で確認した。規模は周溝芯々間で5.9×8.2m、西辺は確認できない。検出面からの深さは周溝東辺中央付近で約0.2mである。東辺内側にやや細い溝が確認でき、これは拡張前の方形周溝墓S Z 11307と考える。南辺の溝で環状石斧(1)が出土した。

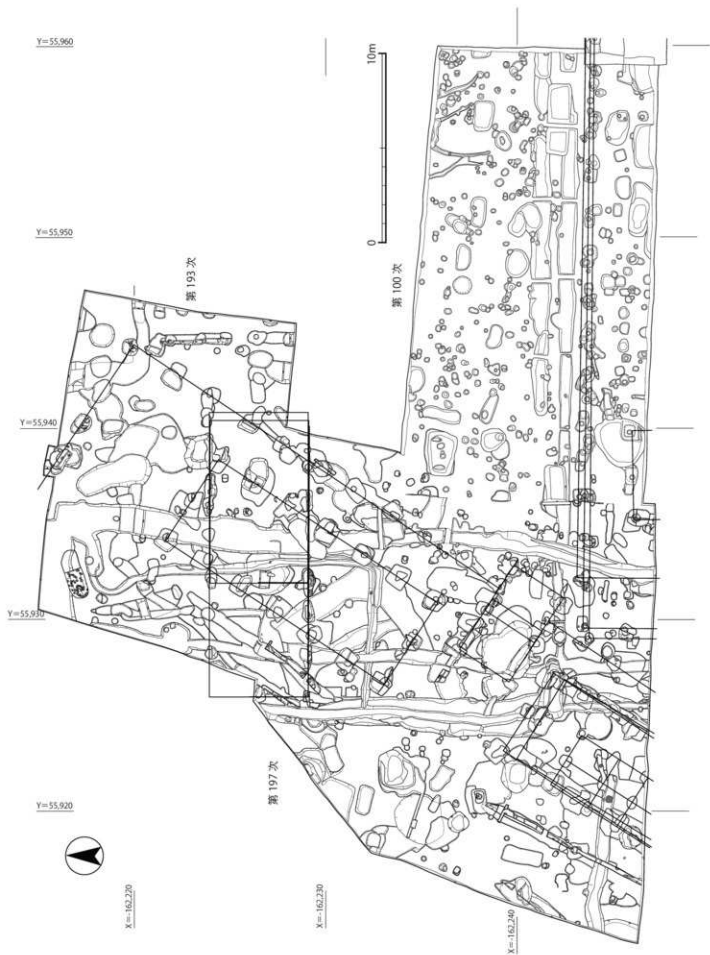
S Z 11303 調査区北東部で確認した。一辺約13mと推定され、周溝北辺・東辺、南辺の大半は調査区外へ延びる。周溝西辺の検出面からの深さは約0.2mで、溝の南西角付近で弥生土器壺(3)が出土したが、口縁部を打欠き、体部下半に焼成後穿孔が見られることから、供献土器と考えられる。



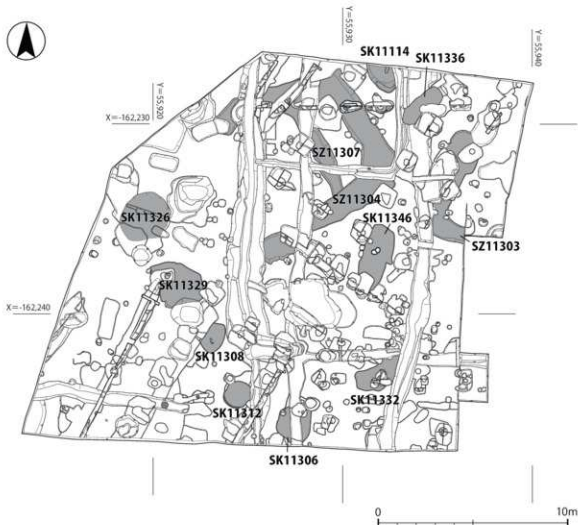
第Ⅱ-1図 第197次調査 グリッド図 (1 : 400)



第Ⅱ-2図 第197次調査 遺構平面図 (1 : 150)



第II-4図 第197次調査と既往調査遺構平面図 (1:200)



第Ⅱ-5図 第197次調査 弥生時代遺構分布図(1:200)

SK 11306・11308・11312・11326・11329 調査区北西から南東に並んで検出された土坑である。いずれも平面形は不整形で、全て完掘していないが深さはSK 11326は13cm、SK 11329は42cmである。
SK 11332・11346・11336 平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。これらは方形周溝墓の周溝の可能性はあるが、ここでは土坑としておく。

(2) 古墳時代

竪穴建物1棟・土坑3基を確認した。

SI 11321 調査区南西部に位置し、南4分の1ほどが調査区外へ延びる。一辺約6mで、確認した深さは検出面から約15cmである。建物東壁際に被熱面があり、そこから北東に延びる小溝があるが、この溝は煙道で、建物東辺にカマドを持つと考えられる。完掘していないため主柱穴等は確認していない。

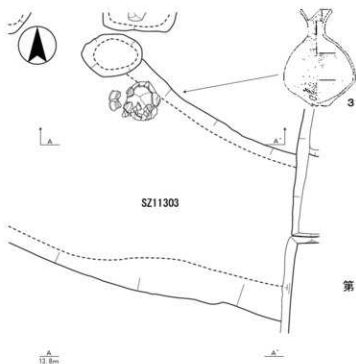
SK 11335 調査区北西部に位置し、大半が調査区

外に広がる。一辺1.8mの方形を呈する。深さは底面まで掘削しておらず不明だが14cm以上と考えられる。出土遺物に土師器高杯(26)があり、包含層からではあるが土坑南辺傍らで勾玉形石製模造品(96)が出土している。

SK 11333 調査区南西部、SI 11321が重複する土坑である。土坑の北東角は隅丸状を呈し、SK 11335のような小型土坑もしくは竪穴建物となる可能性がある。出土遺物は土師器残片がある。

SK 11301 方形周溝墓SZ 11303や飛鳥時代SA 11310、奈良時代SB 11342・11345が重複し、全体の形状が明確でない。出土遺物は土師器残片・高杯脚部片等が主体となるが図示できるような破片はない。剣形石製模造品(27)が出土している。

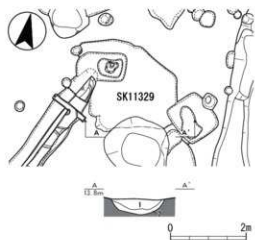
これらの遺構の時期はいずれも5世紀後半～6世紀前半の範囲に収まると考えられる。その他、包含



A
13.8m

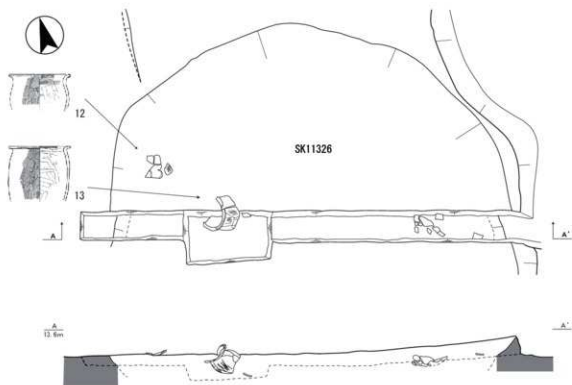


第Ⅱ-6図 SZ11303土器出土状況平面・立面図 (1:20)



- 1 10R2/1蓋シルト
2 1に10R5/6貫通シルトブロック (厚→5.0cm)が5%

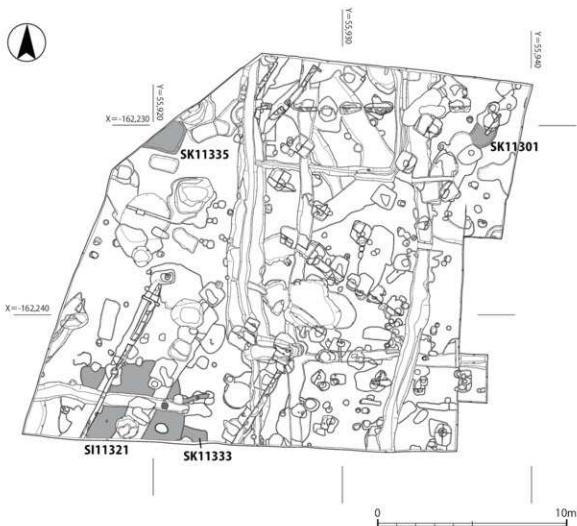
第Ⅱ-8図 SK11329見通し断面図 (1:100)



A
13.8m

第Ⅱ-7図 SK11326土器出土状況平面・立面図 (1:20)

0 5m



第Ⅱ-9図 第197次調査 古墳時代遺構分布図(1:200)

層からであるが勾玉形石製模造品(177)のほか、破片ではあるが土師器高杯が十数点分出土している。

(3) 飛鳥時代

北接する第193次調査区から続く、北から東へ約 33° 傾く軸方向の掘立柱建物1棟と掘立柱塼1条、建替えを伴う掘立柱建物1棟、門2棟などを検出した。

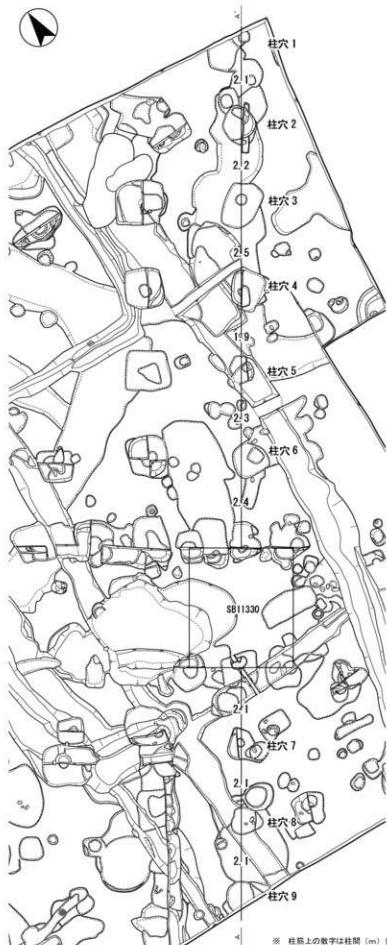
SA11310 南北方向の掘立柱塼である。第193次調査ではSA11120としていたが、それは区画北辺となる東西方向の塼の番号とし、南北方向は新たに遺構番号を付与した。柱掘方は一辺0.8~1.0mの不整形で、明確な方形を志向しないようである。柱掘方の深さは検出面から0.3~0.5m、柱痕跡底面の標高は12.9~13.3mである。柱直径は15~18cm、柱抜取穴は見られない。柱間は1.9~2.5mで、北東角から柱11本目と12本目の間のみ柱間3mとなり、こ

こにSB11330が取り付く。

SB11320 2間×1間の四脚門と考えられる。重複関係から、後述するSB11330に先行する。北側柱列の柱穴は全て確認できるが、南側柱列の柱穴5は風倒木により一部が確認できるのみである。柱掘方は隅丸長方形で、北側柱列で見ると柱掘方の両辺を描えるようである。柱直径は18~20cmで、柱抜取穴は5か所で確認でき、北側柱列は北側へ、南側柱列は南側へといずれも柱は外側へ倒す。北側柱列に先行するSD11297については後述する。

SB11330 2間×1間の四脚門と考えられる。SA11310に取り付く。重複関係からSB11320より新しい。柱掘方はSB11320に比して小型の隅丸方形である。柱直径は18~20cmである。

SB11110 第193次調査で検出した掘立柱建物の南部分で、今回の調査で桁行6間×梁行2間と規模

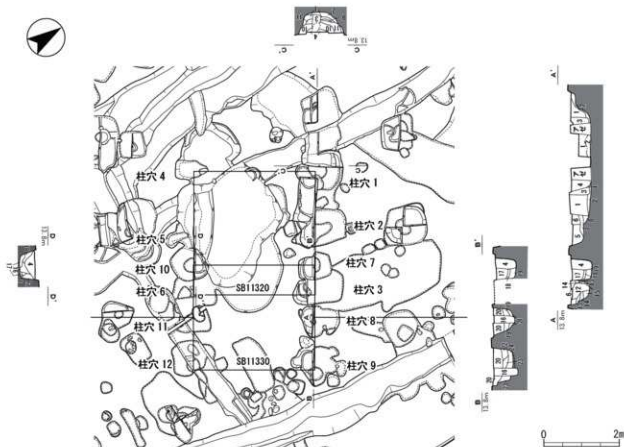


※ 柱上の数字は柱間 (m) を表す。

第Ⅱ-10図 SA 11310 平面・土層断面図 (1:100)



- 1 1076G:2層黒シルト
- 2 1076J:2層黒シルトに1076S:2に似た黄褐色シルトブロック (厚=2.0m) が5%
- 3 1076I:4層黒シルトに1076H:4層黒シルトブロック (厚=1.0m) が10%
- 4 2.57D:2層黒シルトに1076H:4層黒シルトブロック (厚=1.0m) が2%
- 5 1076D:4層黒シルトに1076H:4層黒シルトブロック (厚=1.0m) が5%
- 6 1076C:4層黒シルトに2.57S:4層黄褐色シルト (厚=0.5m) が10%
- 7 2.57C:2層黒シルトに1076S:2に似た黄褐色シルトブロック (厚=1.0m) が5%
- 8 1076Z:2層黒シルトに2.57B:2に似た黄褐色シルト (厚=0.5m) が10%
- 9 2.57D:2層黒シルトに1076S:4層黄褐色シルトブロック (厚=2.0m) が10%
- 10 1076E:2層黒シルトに1076S:4層黄褐色シルトブロック (厚=2.0m) が10%
- 11 2.57E:1層シルトに2.57A:5層黄褐色シルトブロック (厚=2.0m) が2%



- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR2/1黒シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が1%</p> <p>2 5Y3/2黒シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック (径0.5\sim3.0cm) が10%、10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック (径\sim1.0cm) が30%</p> <p>3 5Y2/2オリーブ褐色シルト</p> <p>4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトに2.5Y4/4オリーブ褐色シルトブロック (径1.0\sim5.0cm) が20%</p> <p>5 10YR2/1黒シルトに2.5Y4/4オリーブ褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が10%、赤土粒が10%、10YR5/6黄褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が10%、</p> <p>2.5Y4/1黄褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が10%</p> <p>6 10YR2/1黒シルトに10YR5/6黄褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が10%</p> <p>7 10YR2/3黒シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック (径\sim3.0cm) が20%、
径 (径0.5\sim2.0cm) が3%</p> <p>8 2.5Y3/2黒シルトに10YR2/4暗褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が3%</p> <p>9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルト粒 (径\sim0.5cm) が10%</p> <p>10 10YR2/2黒シルトに10YR4/2灰黄褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が2%、</p> <p>2.5Y6/3にぶい黄褐色シルト粒 (径\sim0.5cm) が5%</p> <p>11 10YR2/2黒シルトに10YR4/4暗シルト粒 (径\sim0.5cm) が10%、
径 (径\sim0.5cm) が5%</p> | <p>12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトに10YR4/2灰黄褐色シルト粒 (径\sim0.5cm) が10%、</p> <p>10YR2/2黒シルト粒 (径\sim1.0cm) が5%</p> <p>13 2.5Y3/2黒シルトに10YR4/2灰黄褐色シルトブロック (径\sim2.0cm) が5%</p> <p>14 2.5Y3/2黒シルト</p> <p>15 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトに10YR5/3にぶい黄褐色シルト粒 (径\sim0.5cm) が5%、
径 (径0.5cm) が5%</p> <p>16 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト</p> <p>17 10YR2/3黒シルトに10YR4/6暗シルトブロック (径\sim10cm) が20%、</p> <p>2.5Y5/4黄褐色シルトブロック (径\sim2.0cm) が5%</p> <p>18 10YR3/1黒シルトに10YR5/6黄褐色シルト粒 (径\sim0.5cm) が5%</p> <p>19 7.5Y3/2黒シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック (径\sim1.0cm) が5%</p> <p>20 10YR2/2黒シルトに10YR4/2暗褐色シルト粒 (径\sim1.0cm) が10%</p> <p>21 2.5Y4/4オリーブ褐色シルトに10YR3/2黒シルト粒 (径\sim1.0cm) が5%</p> <p>22 10YR2/2黒シルトに10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック (径\sim2.0cm) が5%、
径 (径\sim1.0cm) が5%</p> <p>23 10YR2/2黒シルトに2.5Y4/4オリーブ褐色シルトブロック (径\sim10.0cm) が5%</p> <p>24 10YR4/4暗シルトに10YR3/4暗褐色シルトブロック (径\sim1.0cm) が5%、
径 (径\sim1.0cm) が5%</p> |
|--|---|

第II-11図 SB11320・11330 平面・土層断面図 (1:100)

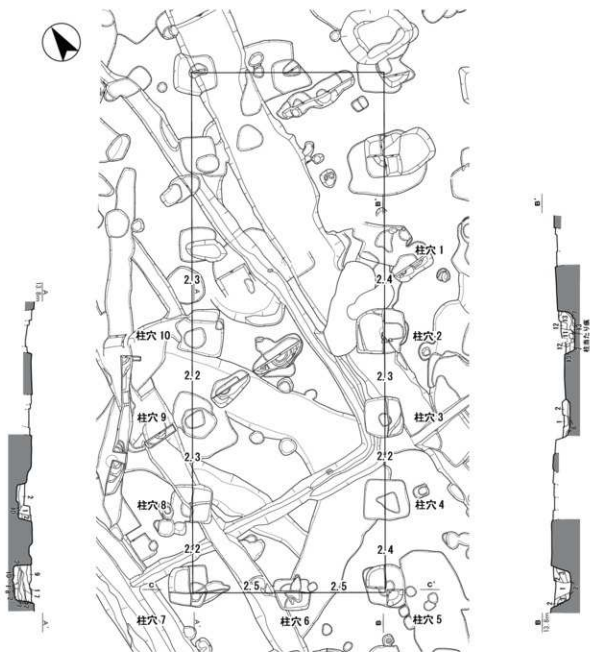
が確定できた。柱掘方の平面形は隅丸方形である。柱抜取穴が6か所確認でき、抜取穴には白色粘土(土層図では灰黄色シルトであるが、本文中では「白色粘土」とする)が充填される。柱穴2の抜取部分に白色粘土の他、円礫が入る。柱直径は20cmである。柱痕跡底の標高は側柱でおよそ13m、妻柱で13.2mと妻柱が浅い。

SB11339 調査区南部で検出した桁行4間以上×梁行2間の掘立柱建物である。桁行柱筋は布振り、妻柱は壱掘りとなる。北に位置するSB11110と比較すると、東へ0.4mずれて建てられている。建替えを伴うため、全ての柱を確認できていない。柱抜取穴が3か所確認でき、その埋土には白色粘土が

入る。

SB11340 SB11339に重複して北に0.9m、西に0.2mずらして建てられている。桁行4間以上×梁行2間で、掘方は壱掘りである。柱痕跡は明確ではないが、西側柱で2か所、東側柱で3か所確認している。柱抜取穴は4か所確認でき、西側に柱を倒しているようである。柱掘方埋土と柱抜取穴には白色粘土が確認できる。

SD11107 SB11110の西で検出した全長3.9m、幅0.5 \sim 0.7mの溝である。北部分は第193次調査で確認している。縦断方向に半截したところ、底面が2か所深い箇所があり、土層断面観察においてその箇所に柱痕跡を確認した。溝の縦断形状は、底面が

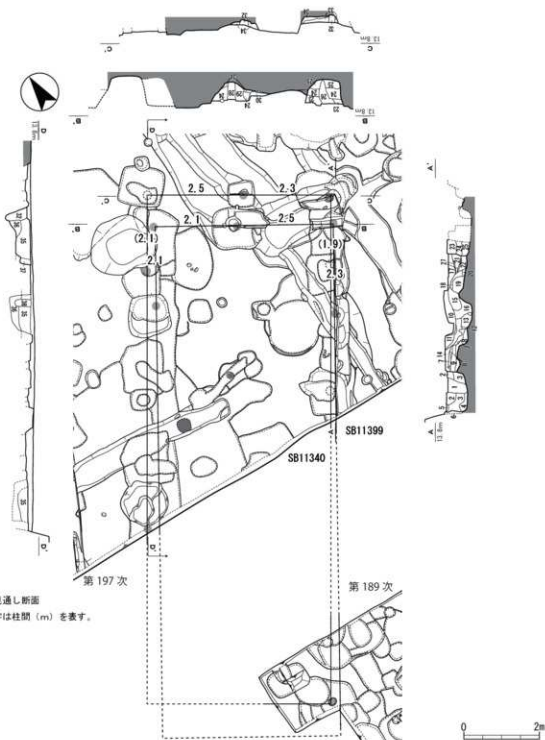


※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表す。



- 1 10YR3/3細砂シルトに2.5Y5/2細灰質シルトブロック (厚~5.0cm) が20%
- 2 10YR2/2黒埴シルトに10YR5/6黄埴シルトブロック (厚~5.0cm) が10%
- 3 10YR3/3細砂シルトに10YR2/2黒埴シルトが50%
- 4 10YR2/1黒シルトに10YR5/6黄埴シルトブロック (厚~1.0cm) が10%
- 5 10YR3/1黒埴シルトに10YR5/6黄埴シルト粒 (厚~0.5cm) が10%【SZ11304埋土】
- 6 10YR4/3にぶい黄埴シルト
- 7 10YR4/4粘シルトに10YR2/2黒埴シルトブロック (厚~1.0cm) が3%
- 8 10YR3/4細砂シルト
- 9 10YR3/4細砂シルトに10YR2/1黒シルトブロック (厚~1.0cm) が5%
- 10 10YR2/3黒埴シルトに10YR5/6黄埴シルトブロック (厚~5.0cm) が10%
- 11 2.5Y4/2細灰質シルトに10YR2/2黒埴シルト粒 (厚~1.0cm) が1%
- 12 10YR2/2黒埴シルトに2.5Y4/2細灰質シルトブロック (厚~3.0cm) が30%
- 13 10YR2/2黒埴シルトに10YR4/6粘シルト粒 (厚~1.0cm) が20%

第II-12図 SB11110 平面・土層断面図 (1:100)

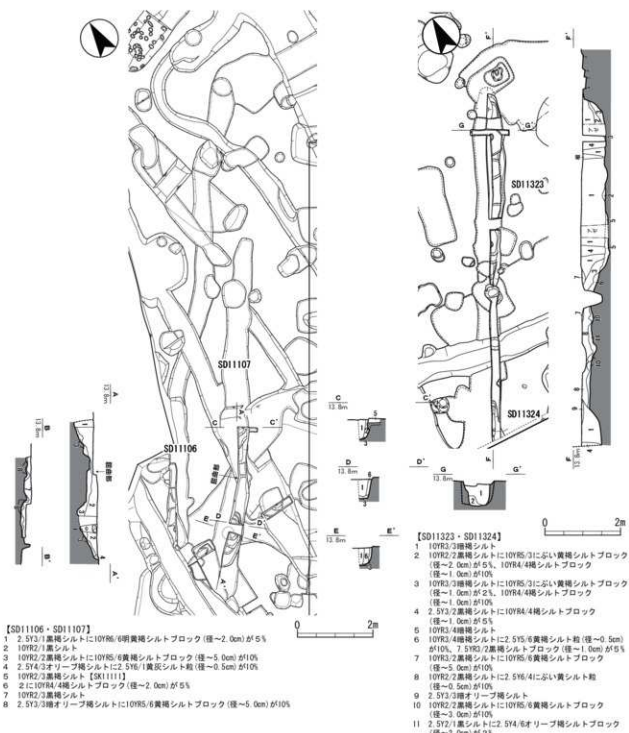


※ 西側柱筋は見通し断面

※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表す。

- | | |
|--|--|
| <p>1 2.5Y/2階床裏シルトに10YR5/4にぶい貫通シルトブロック (径=1.0cm) が10%</p> <p>2 7.5YR3/2階床裏シルトに7.5YR5/6明透シルトブロック (径=1.0cm) が10%、10YR3/1階床裏シルトブロック (径=1.0cm) が5%</p> <p>3 10YR3/2階床裏シルトに2.5Y5/6貫通シルト粒 (径=0.5cm) が10%、10YR3/3階床裏シルトブロック (径=1.0cm) が10%</p> <p>4 2.5Y暗オリーブ焼シルトに2.5Y6/4にぶい貫通シルトブロック (径=3.0cm) が20%</p> <p>5 10YR4/4焼シルト</p> <p>6 10YR2/3階床裏シルトに2.5Y5/4貫通シルトブロック (径=1.0cm) が10%</p> <p>7 10YR5/4貫通シルト</p> <p>8 10YR2/4階床裏シルト</p> <p>9 10YR2/3階床裏シルトに2.5Y5/4貫通シルトブロック (径=2.0cm) が30%</p> <p>10 7.5YR3/2階床裏シルト 【S011305】</p> <p>11 2.5Y4/3オリーブ焼シルトに2.5Y5/2階床裏シルトブロック (径=1.0cm) が10%、10YR2/2階床裏シルトブロック (径=1.0cm) が10%</p> <p>12 10YR2/1裏シルトに7.5YR5/6明透シルトブロック (径=1.0cm) が10%</p> <p>13 7.5YR3/2階床裏シルトに2.5Y5/4貫通シルトブロック (径=3.0cm) が30%</p> <p>14 10YR3/2階床裏シルト</p> <p>15 10YR3/2階床裏シルトに10YR5/6貫通シルトブロック (径=2.0cm) が10%、2.5Y4/6オリーブ焼シルトブロック (径=2.0cm) が10%</p> <p>16 2.5Y3/3暗オリーブ焼シルトに10YR5/6貫通シルトブロック (径=1.0cm) が5%、2.5Y2/1裏シルトブロック (径=1.0cm) が5%</p> <p>17 10YR2/1裏シルトに2.5Y5/3貫通シルト</p> <p>18 2.5Y4/3オリーブ焼シルト</p> <p>19 10YR3/3階床裏シルトに2.5Y5/4貫通シルトブロック (径=1.0cm) が10%、7.5YR2/1裏シルトブロック (径=1.0cm) が5%</p> | <p>20 10YR3/2階床裏シルトに10YR4/6貫通シルトブロック (径=2.0cm) が5%</p> <p>21 2.5Y3/3暗オリーブ焼シルトに2.5Y4/4オリーブ焼シルトブロック (径=1.0cm) が5%</p> <p>22 10YR2/1裏シルトに7.5YR4/4焼シルトブロック (径=2.0cm) が5%</p> <p>23 10YR3/4階床裏シルトに2.5Y5/4貫通シルト粒 (径=0.5cm) が10%、5Y2/2オリーブ焼シルト粒 (径=0.5cm) が10%</p> <p>24 2.5Y3/3暗オリーブ焼シルトに2.5Y4/2階床裏シルトブロック (径=5.0cm) が10%</p> <p>25 10YR2/3階床裏シルトに10YR5/6貫通シルトブロック (径=1.0cm) が10%、10YR2/1裏シルトブロック (径=1.0cm) が10%</p> <p>26 2.5Y4/2階床裏シルトに10YR2/1裏シルト粒 (径=0.5cm) が5%</p> <p>27 10YR5/6貫通シルト</p> <p>28 2.5Y4/2階床裏シルト</p> <p>29 10YR2/7階床裏シルトに10YR6/4にぶい貫通シルト粒 (径=0.5cm) が5%、7.5YR2/2階床裏シルト粒 (径=0.5cm) が5%</p> <p>30 2.5Y3/3暗オリーブ焼シルト 【SK11327】</p> <p>31 2.5Y3/2階床裏シルトに10YR5/6貫通シルトブロック (径=1.0cm) が5%</p> <p>32 2.5Y5/2階床裏シルト</p> <p>33 10YR3/2階床裏シルトに10YR5/6貫通シルトブロック (径=2.0cm) が10% 【S011316】</p> <p>34 10YR2/3階床裏シルトに10YR4/4焼シルトブロック (径=5.0cm) が10%</p> <p>37 10YR2/3階床裏シルトに10YR4/3にぶい貫通シルトブロック (径=3.0cm) が5%、10YR2/1裏シルト粒 (径=1.0cm) が5%</p> <p>38 10YR3/3階床裏シルト</p> <p>39 10YR3/3階床裏シルト</p> <p>32 2.5Y4/2階床裏シルト</p> <p>33 10YR3/1階床裏シルトに10YR5/6貫通シルトブロック (径=5.0cm) が20%</p> <p>34 10YR4/4焼シルトに2.5Y3/3暗オリーブ焼シルトブロック (径=2.0cm) が5%</p> |
|--|--|

第II-13図 SB11339・11340 平面・土層断面図 (1:100)



第Ⅱ-14図 SD11106・11107・11323・11324 平面・土層断面図 (1:100)

溝南端から0.7mかけて傾斜し、柱痕跡部分に達し、また0.2mかけて立ち上がる。浅い床面と柱痕跡底部との比高は0.2~0.3mである。横断形状はほぼ箱型で、溝の壁面は整形していない。また、柱痕跡部分以外の埋土は暗褐色シルト土であり、地山ブロックの混入はない。

SD11323 SB11339・11340の西に位置する全長5.9m、幅0.7~0.8mの溝である。南部分は古墳時代S11321に重複するが、埋土はにぶい黄色シルト

粒の混入の有無でしか判断できないほど類似する。溝の主軸方向はN27°Eと飛鳥時代の他の遺構とはやや異なる。縦断面形は、北端から0.4mかけて緩やかに下がり、検出面から0.65mの深さで3.9mほぼ平坦となり、そこからまた1.7mかけて立ち上がる。横断面形は箱型、もしくは底部付近がややオーバーハングする場所もあり、壁面は整形していない。底面では段丘礫が露出する。溝埋土は黒色土であり、地山ブロックの混入はない。わずかな暗褐色土の混

入と底面の圧痕の観察により、直径15cm程の柱痕跡を2か所確認した。柱抜取穴はない。破片も含めて遺物は非常に少なく、溝として一定期間置いていた状況ではないと思われる。また、土層断面から滞水状況は見られない。

SD 11324 SD 11323の南に軸を同じくして伸びる。当初はSD 11323の延長として縦断方向に半截したところ、底面が立ち上がり一旦途切れることから、別遺構と判断し、別遺構番号を付与した。

検出長1.3m、幅は0.8mで、縦断面形は北から0.9mかけて検出面からの深さ0.5mまで傾斜し、その深度を保って調査区壁まで延びる。横断面形状は箱型、もしくは袋状となり、溝壁面は整形していない。底面はこのあたりの段丘礫を含む面が露出する。溝埋土は黒褐色シルトで、地山ブロックの混入はない。わずかな褐色シルトブロックの混入と底面の圧痕の観察により直径15cm程の柱痕跡を1か所確認した。出土遺物は弥生土器甕片など細片が多く、古墳時代土師器高杯細片などがわずかに含まれることから、古墳時代後期以降に掘削された溝といえる。

SD 11297 SB 11320の北側柱筋が重複する溝である。長さ3.8m、幅1.0mで深さは0.6mである。横断面形は箱型で、溝壁面は整形していない。縦断面形は西端から0.6mかけて深さ0.6mまで傾斜し、そのまま東端まで深度を保つようである。東端はSB 11320の柱穴が重複するため不明である。SB 11320に伴う布掘り溝とも考えられるが、溝の埋土である黒色土が検出面まで確認され、それに重複してSB 11320の柱掘方が掘削されていること、SB 11320の南柱筋では同様の溝が確認されないことから、SB 11320に伴うものではないと現段階では判断する。出土遺物は弥生土器(29・30)、7世紀前半代の須恵器・土師器(32~34)の他、6~7世紀前半代と思われる土師器甕体部片等があることから、SB 11320掘削以前に埋没したと考えられる。土器は細片ばかりであること、溝の壁面が整えられていないことなどから、溝は掘削してすぐ埋められ、土器片はその際に混入したと思われる。

SB 11341 調査区南部で確認した2間×3間以上の総柱建物である。柱間は1.5mで、柱直径は約15cmである。南北方向は西側柱の柱を調査区壁面で確認

しており、少なくとも3間であると判断した。東西方向は西側には延びないようであるが、東側にはもう1間延びる可能性はあるものの、ちょうどSB 11339・11340の東側柱列が重複し、確認できない可能性がある。

(4) 奈良時代

奈良時代の遺構は、隣接地の調査によりほぼ方位を向くことがわかってきている。今回の調査においても、東西棟の掘立柱建物2棟以上、南北棟と思われる掘立柱建物1棟、東西方向の掘立柱塼3条、南北方向の掘立柱塼3条、溝1条を確認した。

SB 11342・11345 東西棟の掘立柱建物である。北半部が第193次調査で確認されており、同調査では2回の建替えを伴う掘立柱塼とされたが、今回の調査により建替えを伴う掘立柱建物と判断した。今後の整理の煩雑さを避けるため、新たに遺構番号を付与した。

古相の建物はSB 11342で、桁行7間×梁行2間の東西棟と考えられる。柱掘方の形状は柱穴1(西梁柱)・柱穴2(南西隅柱)は方形だが、それ以外は不整形を呈す。柱間は2.0~2.2mで等間隔ではない。SB 11345はSB 11342よりも新しい桁行4間×梁行2間の建物として復元したが、西の妻柱が確認できていないため検討の余地が残る。柱穴8~10等は重複する柱がまだ見られることから、もう1棟別の建物が考えられるが、今回の調査では明確にできなかった。

SB 11342・SB 11345とも、柱掘方・柱抜取穴には白色粘土がブロック状に入るか、もしくは白色粘土単層で充填される。

調査区南東部の掘立柱群 史跡西部で確認されている2つの奈良時代方形区画のうち、東側の区画については第100次・144次調査で東西方向の掘立柱塼が確認され、第100次調査では4条、その東側の調査である第144次調査では2条に復元されている。今回の調査では、南側の第189次調査成果と合わせ、東側区画の北西隅部分が確認できた。

今回確認した範囲では、掘立柱塼は2回の建替えがあり、1回目の建替え時に西へ1間分(2.7m)拡張し、2回目の建替えでもその場所を踏襲している。いずれの掘立柱塼の柱穴も柱抜取穴は見られない。



- 1 10YR2/3黄褐色シルトに2.5Y3/3緑オリーブ褐シルトが層状に入る【包含層】
- 2 10YR2/3黄褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック(「白色粘土」、径→5.0cm)が10%
- 3 10YR2/3黄褐色シルトに10YR1/7.1黒シルト粒(径→1.0cm)が15%
- 4 10YR2/3黄褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト粒(「白色粘土」、径→1.0cm)が5%
- 5 10YR2/3黄褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト(「白色粘土」、径→2.0cm)、10YR1/7.1黒シルト粒(径→2.0cm)が10%
- 6 10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック(「白色粘土」、径→4.0cm)が10%、10YR1/7.1黒シルト粒(径→1.0cm)が5%
- 7 5YR2/1黒シルト【S11207埋土】
- 8 10YR2/3黄褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック(径→1.0cm)が5%
- 9 2.5Y3/3緑オリーブ褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト(「白色粘土」)が層状に入る
- 10 2.5Y3/3緑オリーブ褐シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック(「白色粘土」、径3.0×5.0cm)が5%
- 11 10YR3/2黄褐色シルト
- 12 2.5Y2/2黄褐色シルトに10YR4/4暗シルト粒(径→0.5cm)が10%
- 13 10YR2/2黄褐色シルトに10YR4/4暗シルトブロック(径→2.0cm)が5%
- 14 10YR2/4暗褐色シルトに2.5YR2/2黄褐色シルトブロックが10%
- 15 2.5Y3/3緑オリーブ褐シルト【黒埋土】
- 16 7.5YR2/3暗褐色シルト
- 17 10YR2/4暗褐色シルト
- 18 10YR2/3暗褐色シルトに10YR1/7.1黒シルト粒(径→0.2cm)、2.5Y3/3黄褐色シルト粒(径→0.2cm)が10%
- 19 7.5YR2/2黄褐色シルト
- 20 10YR4/2黄褐色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト粒(白色粘土、径→0.5cm)が10%
- 21 10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルトブロック(径→1.0cm)と7.5YR2/1黒シルトブロック(径→1.0cm)が10%
- 22 7.5YR2/2黄褐色シルト
- 23 10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色シルト粒(径0.5→1.0cm)が入る
- 24 2.5Y3/3緑オリーブ褐シルト

第Ⅱ-15図 「白色粘土」確認箇所土層断面図(1:100)

以下、対応する個々の掘立柱塼について見ていく。

SA 9093・11018 最初期の掘立柱塼である。柱掘方の形状は不整形形で、SA 9094が重複するため土層断面ではわからないが、柱直径は平面検出で0.2m、底面の深さは検出面から0.45m(標高13.2m)である。柱間は2.1~2.6mである。今回の調査で、東西方向SA 9093は19間(44.5m)以上、南北方向SA 11018は7間(16.5m)以上となった。

SA 6943・11343 1回目の建替えによる掘立柱塼である。柱掘方の形状は隅の柱以外は隅丸長方形に近い。柱直径は18cm、深さは検出面から0.6m(標高13m)である。柱間は2.1~2.7mである。東西方向SA 6943は13間(32m)以上、南北方向SA 11343は7間以上(16.5m)以上と考えられる。

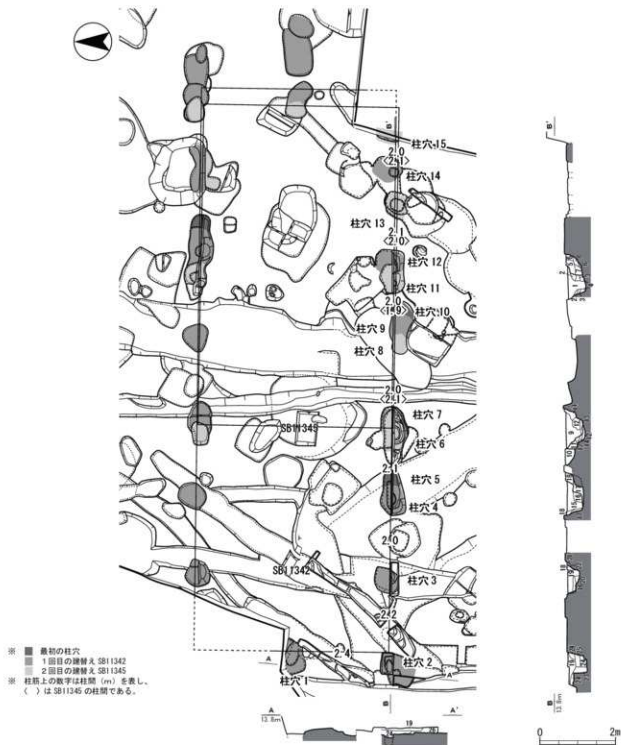
SA 9094・11344 2回目の建替えによる掘立柱塼である。東西方向SA 9094は隅の柱穴が比較的整った隅丸長方形を呈するが、第197次調査地内で検出した他の柱穴2か所は大きさも平面形も揃わない。柱直径は15cm、底面の深さは検出面から0.4m(標高

13.2m)である。柱間は2.1~2.4mである。今回の調査で、東西方向SA 9094は21間(46m)以上、南北方向SA 11344は7間(16.5m)以上となった。

SD 6960 掘立柱塼と方向を同じくし、拡張された2期の掘立柱塼に沿ってL字状に屈曲する溝である。特に、1回目の建替えによるSA 6943・11343とは溝芯々からの距離が1.4mと同じであることから、1回目の建替えに伴って掘削されたと考えられる。第100次調査区へ延び、東西方向の長さは約29m、南北方向は本調査区内では約5mを確認できるが、第189次調査区では近世のSD 11020が重複し、検出できていない。溝の断面形状は逆台形状を呈し、埋土上層には白色粘土が混じる。形状等から区画を意識した溝と考えられる。

SB 6950 第100次・第189次調査で確認されている柱穴と対応し、桁行5間×梁行2間の建物となる。柱掘方は隅丸長方形を呈し、柱抜取穴には白色粘土と円礫が充填される。

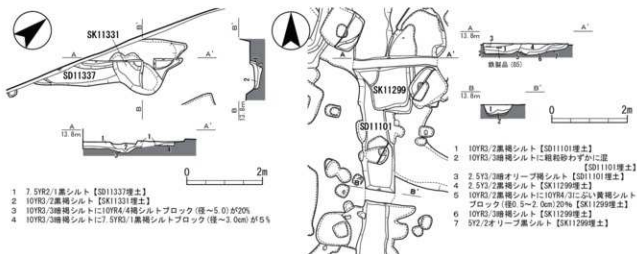
(5) 平安時代末~鎌倉時代、近世



- 最初の柱穴
 ■ 1回目の検体土 SB11342
 ■ 2回目の検体土 SB11345
 ※ 柱筋上の数字は柱間 (m) を表し、
 () は SB11345 の柱間である。

- | | |
|--|--|
| <p>1 2.5Y/2黄灰シルトに炭化物粒 (径\sim0.5cm) が5%、7.5YR/4にぶい層シルト粒 (径\sim0.5cm) が5%</p> <p>2 10YR2/3暗緑シルトに炭化物粒 (径\sim1.0cm) が15%</p> <p>3 10YR3/3暗緑シルトに7.5YR/4にぶい層シルトブロック (径\sim1.5cm) が15%、炭化物粒 (径\sim1.0cm) が10%</p> <p>4 10YR2/3暗緑シルトに7.5YR/4にぶい層シルトブロック (径\sim1.0cm) が5%</p> <p>5 10YR4/2にぶい黄緑シルトに2.5Y/2黄灰シルトブロック (径\sim2.0cm) が10%、7.5YR/4にぶい層シルトブロック (径\sim1.0cm) が5%、炭化物粒 (径\sim0.5cm) が5%</p> <p>6 10YR3/4暗緑シルトに7.5YR/4にぶい層シルトブロック (径\sim1.0cm) が15%、炭化物粒 (径\sim0.5cm) が10%</p> <p>7 10YR4/2にぶい黄緑シルトに7.5YR/4にぶい層シルトブロック (径\sim1.0cm) が3%、炭化物粒 (径\sim1.0cm) が2%</p> <p>8 2.5Y/4オリーブ褐シルトに7.5YR/4にぶい層シルト粒 (径\sim0.5cm) が10%、炭化物粒 (径\sim0.5cm) が5%、2.5Y/2黄灰シルトブロック (径\sim1.0cm) が5%</p> <p>9 2.5Y/2暗黄緑シルト</p> <p>10 10YR3/2暗緑シルトに10YR4/3にぶい黄緑シルトブロック (径\sim3.0cm) が10%</p> <p>11 10YR3/2暗緑シルト</p> | <p>12 10YR5/6黄緑シルト (著しく硬化) に10YR3/4暗緑シルトブロック (径\sim2.0cm) が20%</p> <p>13 10YR3/2暗緑シルト</p> <p>14 10YR2/1黒シルト</p> <p>15 10YR2/3暗緑シルトに10YR4/6暗緑シルトブロック (径\sim5.0cm) が2%</p> <p>16 10YR3/2暗緑シルトに10YR4/6暗緑シルトブロック (径\sim5.0cm) が2%</p> <p>17 2.5Y/3暗オリーブ褐シルトに10YR4/6暗緑シルトブロック (径\sim5.0cm) が15%</p> <p>18 10YR3/4暗緑シルト</p> <p>19 2.5Y/4オリーブ褐シルトに2.5Y/6/1黄灰シルト粒 (径\sim0.5cm) が10%</p> <p>20 10YR3/3暗緑シルトに2.5Y/6/1黄灰シルト粒 (径\sim0.5cm) が10%、7.5YR/4にぶい層シルト粒 (径\sim0.5cm) が5%</p> <p>21 7.5YR3/1黄緑シルトに10YR4/6暗緑シルトブロック (径\sim1.0cm) が5%</p> <p>22 10YR2/1黒シルト 【S211304埋土】</p> <p>23 10YR3/3暗緑シルトに10YR4/6暗緑シルト粒 (径\sim0.5cm) が5%</p> <p>24 10YR2/3暗緑シルトに2.5Y/6/1黄灰シルト粒 (径\sim0.5cm) が10%</p> <p>25 2.5Y/4オリーブ褐シルト</p> <p>26 10YR2/2暗緑シルト 【S211106埋土】</p> |
|--|--|

第II-17図 SB11342・11345 平面・土層断面図 (1:100)



第Ⅱ-18図 SD11337・SK11331、SD11101 平面・土層断面図(1:100)

屋敷地を区画する溝群がある。また、調査区全域で多数のピットが確認でき、その中には根石となる円礫を伴うピットがあることから、いくつかは掘立柱建物の柱穴と考えられるが遺構の重複が多く、建物として認識できなかった。

SD 6299 第85-8次調査地から延びるやや弧を描く溝で、当調査区内では東西方向に9.5m直進して途切れる。時期は土師器小皿(70)から11世紀後葉～12世紀前半と考えられる。

SE 11325 大部分が調査区外へと伸びるため完掘はできず、底面の深さは不明である。形状から表掘りの井戸と思われる。13世紀後半～14世紀前半代の南伊勢系土師器(75・76)が出土した。

SD 11101・11103・11305 いずれも南北方向にほぼ直線に延びる溝であり、土地区画や排水機能を有するものと推測される。出土遺物から18世紀後半～19世紀初頭の溝群である。

SD 11101は近世陶磁器(83・84)、土師器鍋(82)や鉄製品包丁(85)のような供膳具・煮炊具・調理具類等日常雑器が出土し、おそらく東側にあった屋敷地を囲う溝と見られる。

それに比してSD 11103・11305の出土遺物は少ない。SD 11305は東側肩に幅0.5～0.8mの大走り状平坦面を持ち、溝の西側寄りに幅0.5mでより深くなるが、これは別遺構の可能性もある。出土遺物の少なさは屋敷中心部から離れているためか。

SD 11112 第193次調査地から延び、本調査区で西に90°屈曲する。溝の西・北の壁面はほぼ垂直にな

り、東・南に向かってなだらかに立ち上がる断面形状を呈することから、板状の遮蔽施設の可能性もある。出土遺物には土師器焙烙片があるが、全体的に少ない。検出時にSD 11305よりも新しいことを確認している。

SK 11315 東西2.2m・南北2m、検出面からの深さ0.6mの土坑である。椀や皿、徳利等の供膳具に加え、焙烙・行平鍋等の煮炊具、複数の紅皿等19世紀初頭の良好な一括資料が出土した。調査区の南150mを通る伊勢街道との関わりが想起される。

SK 11309 SK 11315とほぼ同時期と考えられるが、遺物は非常に少ない。

(6) その他

SD 11106 飛鳥時代の溝SD 11107の西で、0.7～1.0mの距離を隔てて並走する溝である。SD 11107と同様に縦断方向に半截したが、SD 11107のような柱状の落ち込みは確認できず、溝自体も検出面からの深さが15cmと浅い。出土遺物は弥生土器の壺底部や甕口縁片などの細片のみで、第193次調査地での重複関係から弥生時代以降、近世までの溝と考えられる。

遺構名	所在地(遺構名)	グリッド	長さ	幅	深さ(埋込深さ)	完備-未開	埋土	時期	出土遺物	備考	
SD690	溝	g11-h11 j11-j11 k12-h12	東西8.6m 南北4.6m	幅0.9-0.8 m	14m	完備	B	奈良	土師器皿・釜、須恵器杯蓋	第100次からの続き	
SK11295	土坑	2-h11-j11	1.5m	0.7m	55cm	未開	C	古墳	土師器甕片1片のみ		
SD11101	溝	3-j7-12-h12	20.2m	幅0.84~ 1.4m	17.7~17.5m	完備	C	近世 (19世紀)	弥生土器、円形瓦、土師器鉢・信筒、鉄製品等	第183次からの続き 内線壁?	
SK11296	溝	4-j10	0.8m	幅0.4m	55cm	未開	A	古墳~奈良	土師器甕片		
SD11297	溝	5-g10-h10 g10-h10	3.7m	幅0.95m	0.6m	半開	A	奈良	弥生土器鉢、土師器杯・甕・高杯、須恵器杯蓋、土器、銅片		
SD11298	溝	6-j12-j12	2.2m	幅0.3~0.45 m	4m	完備	D	奈良~奈良	土師器杯片	出土量少ない	
SK11299	土坑	7-h9	2.2m	0.8m	22m	一部完備	C	近世~	須恵器甕片、土師器鉢片、陶器片		
SD11112	溝	8-j7-h9-h g8-h9	東西8.4m 南北3.6m	幅0.3~0.45 m	15~22m	完備	C	少し開	近世	青磁、弥生土器、土師器信筒、	後継状況を確認
SK11301	溝	9-h8	1.6m	1.2m	23m	一部半開	A	古墳~古代	朝鮮石製鏡品、土師器高杯・甕体部片		
SK11302	溝	11-h9-10	2.2m以上	1.64m	9m	未開	A	古墳	土師器高杯部部・甕体部	土坑	
SD11103	溝	12-g7~11-h7 ~12	12.6m	56~71cm	9~22m	一部完備	C	近世	土師器鉢、弥生土器、須恵器甕・甕、近世陶器		
SZ11303	溝	14-h9-h9-h9	5m以上	1.9m以上	4~6.5m	未開	A	弥生	弥生土師器	奈良県高市郡 北流溝なし	
SK11114	土坑	16-h9-j8	2.43m	2m	15m	未開	A	弥生~	弥生土器、土師器甕体部片・杯片、中世土師器小皿片	第183次からの続き 長軸は第192次と合わせて	
SZ11304	溝	20-h8-h8	8.2m	5.9m	20m	未開	A	弥生	弥生土器、甕、環状石片、須恵器杯蓋	奈良溝なし	
SD11108	土坑	21-h7	1m	0.6m	13m	未開	C	古代~	土師器甕体部片、中世土師器鉢体部片		
SK11111	溝	22-h7	1.7m	1m	7.5m	未開	C	奈良?	弥生土器甕口縁部片	193次で土坑	
SD11305	溝	24-g7~12	20.4m	幅0.25~2 m	18~20m	完備	C	近世	弥生(安部)、土師器七ツブア、須恵器甕・甕、近世陶器、口ワケ土師器		
SK11306	土坑	26-g-h12	2.1m	1.76m	10m	未開	A	古代~	古代土師器体部片		
SZ11307	溝	27-h8	5.2m	6m	5.5m	未開	A	弥生	弥生土器? 銅片	近隣の南溝蓋か	
SK11308	土坑	31-f11	1.65m	1m以上	4m	未開	A	弥生	弥生土器、土師器? 片		
SK11309	土坑	32-f10	1.7m	1.5m	0.83m	完備	D	9世紀	近世	土師器鉢、石鏡	
SD11106	溝	33-g7-h8	2.7m以上	幅0.52~ 0.6m	18~30m	半開	A	弥生~	弥生土器甕・甕片・甕口縁	奈良時代か	
SK11311	土坑	34-f11	1.1m	1.1m	48cm	完備	C	中近世~	古代土師器片、中世土師器片	一部カクラン	
SD6299	溝	35-g-f12	9.4m	幅0.55~ 0.9m	8~22m	完備	C	中世~	弥生土器、須恵器片、平安土師器、古代土師器片、口ワケ土師器、緑釉陶器片、土師器小皿・鏡片	第83~84次からの続き	
SK11312	土坑	36-g11-12	2.2m	1.5m	9m	未開	A	弥生?	弥生土器・土師器? 銅片		
SK11313	土坑	37-f9-10	1.45m	0.8m	11.5m	未開	C	古代~	弥生土器片、土師器甕片		
SD11314	溝	38-g11-12	5.6m	幅0.7~ 0.85m	34.5m	半開	D	古代	弥生土器甕片、土師器杯口縁部片	SD11339参照溝	
SK11315	土坑	41-f9	2.2m	1.9m	0.62m	完備	D	近世 (19世紀前半)	近世陶磁器、土師器、土製品、金属製品、石製品、瓦	近世遺物一括整理土坑	
SD11316	溝	42-f11-f12 -12	8.4m	幅0.75m	7m	未開	D	古代	弥生土器片、古代土師器片、近世陶器、山形鏡、寛永通宝	SD11339参照溝	
SK11317	土坑	43-g11	2.1m	0.85m	8.5m	未開	C	古代~	弥生土器片、土師器甕片		
SK11318	土坑	44-f10	1.5m	0.7m	2m	未開	C	古代~	鉄鏃、土師器片		
SK11319	土坑	45-g10	1.4m	0.9m	12m	完備	D	中世~	弥生土器片、須恵器甕片、精製土師器片、中世土師器片、鉄鏃		
SI11321	土坑	46-g-f12	5.2m	2.9m	28m	未開	A	古墳	弥生土器甕・甕、土師器高杯、須恵器甕	東方マド、埋没あり	
SK11322	土坑	47-h8-9	3m	1.85m	10m	未開	C	中世	土師器鉢・甕、陶器(山形鏡)		
SD11323	溝	50-g-f10~12	5.9m	0.82m	0.85~0.73m	半開	A	奈良	弥生土器・甕が大半、須恵器甕体部片、土師器杯片・高杯部部片	柱礎跡2か所	
SK11328	土坑	51-f9	2.4m	0.8m	5m	未開	A	古代?	土師器片		
SE11325	土坑	52-f9	2.15m	1.1m	0.96m	未開	C	埋没 (14世紀代)	土師器鉢・甕、須恵器? 片	奥掘り井戸か	
SK11326	土坑	53-g-f9-10	2.8m	2.5m	21cm	未開	D	弥生	弥生土器甕・甕、ササカ小銅片		

第II-1表 第197次調査 遺構一覧1

遺構名	調査時遺構名	グリッド	長軸	短軸	深さ(掘削深さ)	定形・未定形	埋土	時期	出土遺物	備考
SK11227	土坑	54 e-h11	3m	1.5m	0.31m	定形	C		弥生土器片、須恵器片(厚肉土)、埴輪土師器片	
SD11228	溝	56 g10	1.15m	35cm	18.5cm	未定形	C	古代～	土師器破片(古代～)	近世か
SK11229	土坑	58 f10	2.4m	2.1m	43cm	一部平截	A	弥生	弥生土器破片、埴輪土師器片、鉄製品	
SK11231	土坑	61 e11	1.6m	0.8m	43cm	平截	C	古代～	須恵器片	
SD11187	溝	62 e-h7-B	3.8m	幅0.45～0.75m	29cm	平截	A	飛鳥	弥生土器(出縁文)・埴土師器	柱礎跡2か所
SK11233	土坑	65 f12	1.35m	0.8m	2m	未定形	A	古墳～	土師器破片	型穴跡物の可能性あり
SK11234	土坑	66 a-h8-9	1.5m	0.75m	10cm	未定形	A,B-D	弥生～	弥生土器片	
SK11235	土坑	67 a-h8	1.8m	1.4m	未定形	A	古墳	土師器高坪		
SK11236	溝	68 a8	2.8m	1m	32.5cm	一部平截	A	古代	土師器片(破片)1片のみ	
SD11237	溝	69 a10-11	4m	0.8m	25cm	平截	A	古代～	弥生土器片、土師器破片	
SD11224	溝	71 e11-12	1.3m以上	幅0.85～1m	6.5cm	平截	A	飛鳥	弥生土器破片、土師器(弥生?古墳?)高坪、	柱礎跡1か所
SK11232	土坑	73 b-c 11-12	2.6m以上	1.2m	4m	未定形	A	弥生	弥生土器・埴	
SK11246	土坑	74 b-c 9-10	3.4m	1.5m	4m	未定形	A	弥生	なし	

埋土 A: 黒 B: 白粘土 C: 赤茶 D: 黄ブロック

第Ⅱ-2表 第197次調査 遺構一覧2

遺構名	調査時遺構名	時期	建物平面規模		建物面積 (㎡)	柱間寸法 (m)	柱穴平面規模		柱底深さ(m) 掘出面から (掘深)	柱柱 取穴	布 置	方 向	建物軸	備考
			柱間 (間)	桁行(m) 奥行(m)			柱穴幅方 (m)	柱穴深 (掘深)						
SA11120	柱列2	飛鳥	3+	8.2+	-	2.2/2.4/2.5	0.6~1.0	0.18	0.4~0.6 (12.7~13.1)	×	×	東西	N33° E	SA11300の建替え
SA11300	柱列2	飛鳥	2+	5.6+	-	2.4/2.4	0.7~0.9	未確認	0.4~0.55 (12.8~12.9)	?	×	東西	N33° E	SA11120より古 旧SA11120/履帯(H30)
SA11310	柱列2	飛鳥	10 3+	22.6 8.2+	-	2.4/2.3/2.4/2.1 2.1/2.1/2.4/2.2 2.2/2.2/ 2.0/2.1/2.1	0.6~1.2	0.14	0.35~0.55 (12.7~13.3)	×	×	南北	N33° E	松橋後の南北方向原 SB11330を伴う 旧SA11120/履帯(H30)
SB11320	門1	飛鳥	1 2	3.1 3.0	9.3	3.1 1.5/1.5	1.0~1.2	0.18	0.55 (13.0~13.1)	○	×	東西	N33° E	建替え前 SB11110と対応
SB11330	門2	飛鳥	1 2	3.1 2.6	8.1	3.1 1.3/1.3	0.6~1.0	0.18	0.6~0.7 (12.8~12.9)	×	×	東西	N33° E	建替え後 SA11310に取り付く
SB11110	独立柱建物1	飛鳥	6 2	13.5 5.0	67.0	2.2/2.3/2.1/2.3 2.3/2.3 2.3/2.5	0.85~1.2	0.2	0.4~0.5 (13.0~13.2)	○	×	南北	N33° E	
SB11339	独立柱建物2	飛鳥	3+ 2	7.2+ 4.7	36+	1.6/1.7 2.5/2.5	-	0.2	0.7 (12.9)	○	○	南北	N33° E	第180次SB11015との対 応が不明のため別番号を 付す
SB11340	独立柱建物3	飛鳥	4+ 2	8.2+ 5	41+	1.9/1.6/1.9 2.5/2.5	0.7~1.3	0.2	0.35~0.7 (12.9~13.2)	○	×	南北	N33° E	
SB11341	飛鳥	3 2+	5.8 3.3+	20.5+	2.2/1.8/1.8 1.6/1.7	0.5~0.7	0.3	未確認		×	×	N33° E	廊柱建物	
SA9093	奈良	19+	44.5	-	2.1/2.4	0.6~0.8	0.2	0.45 (13.2)	○	×	東西	N1° E	最初の礎 SA11018と対応	
SA11018	奈良	7+	16.5+	-	2.6	0.4~0.8	0.2	0.45 (13.2)	○	×	南北	N1° E	最初の礎 SA9093と対応	
SA6943	奈良	13+	32+	-	2.7/2.4/2.3	0.45~0.8	0.18	0.6 (13.0)	○	×	東西	N1° E	1回目建替えの礎 SA11343と対応	
SA11343	奈良	7+	16.5+	-	2.1	0.45~0.6	0.18	0.6 (13.0)	×	×	南北	N1° E	1回目建替えの礎 SA6943と対応	
SA9094	奈良	21+	46+	-	2.4/2.1/2.1	0.4~0.8	0.15	0.4 (13.2)	×	×	東西	N1° E	2回目建替えの礎 SA11344と対応	
SA11344	奈良	7+	16.5+	-	2.1	0.7~0.8	0.15	0.4 (13.2)	×	×	南北	N1° E	2回目建替えの礎 SA9094と対応	
SB11342	奈良	7 2	14.3 5	14.4 5	2.2/2.0/2.1/2.0 2.0/2.1/2.0 2.5/2.5	0.6~0.8	0.15	0.4~0.6 (13.1~12.9)	○	×	東西	N1° W	最初の礎物 SA11124一部/履帯(H30)	
SB11345	奈良	4 2	8.2 5	8.2 5	2.1/1.9/2.0/2.2 2.5/2.5	0.5~0.75	0.15	0.55 (13.0)	○	×	東西	N1° W	SB11342に重積する礎物 SA11122一部/履帯(H30)	
SB6950	奈良	9 2	13.3+ 4.8	63.8+	2.3/ 2.4/2.4	0.9~1.1	0.3	0.32 (13.25)	○	×	南北	N3° W	第180次のSA11018・ 11017と対応	

第Ⅱ-3表 第197次調査 独立柱塼・門・独立柱建物一覧

4 遺物

遺物整理用コンテナ73箱分の遺物が出土した。時代毎に分けて遺構毎に、遺物包含層は地区毎(北西17-南東112)に分けて詳述する。遺構出土遺物は、本来の遺構の年代とは異なる遺物についても調査区の遺物の状況を示すため、煩雑ではあるがまとめて掲載している。なお、ここでは特徴的な遺物のみ記述する。詳細は第II-4~6表に記載した。

(1) 弥生時代遺構出土遺物【第II-19図】

SZ 11304出土遺物(1・2) 1は環状石斧である。断面形は裏面が平坦、表面はやや傾斜する台形状で、丁寧に磨かれている。表面にキザミが2か所(1か所は図上部のフレ部分に残る)施される。刃部となる周縁部は人為的に打ち欠く。2の須恵器杯蓋は重複する遺構の混入と考えられる。

SZ 11303出土遺物(3) 周溝から横位で出土した(第II-6図)。口縁部と体部下半に焼成後の打ち欠き・穿孔が見られる。また、体部上半に2条の重弧文が2か所確認できる。

SK 11326出土遺物(4~14) 4~6、8~11は弥生時代前期後葉、12・13は弥生時代中葉の遺物である。

SK 11332出土遺物(16・17) 17は弥生土器細頸甕で、口縁部は完形だが体部下半は4分の1残存、底部は欠損し、底部打ち欠きの可能性がある。焼成後の穿孔等は確認できない。

SK 11336出土遺物(18) 古代の土師器杯である。SK 11336にはSB 11110・11342・11345が重複することから、それらの遺構の混入であると考えられる。

(2) 古墳時代遺構出土遺物【第II-19図】

SI 11321出土遺物(19~25) 22は比較的大型に復元できる土師器碗である。23・24は土師器高杯で、24は辻編年⁽¹⁾4段階のものか。25は須恵器甕頸部で波状文を3段施す。

SK 11335出土遺物(26) 土師器碗形高杯で、杯部と脚部の4分の3が残存する。辻編年4段階、陶色編年のTK 23~47型式の所産と考えられる。

SK 11301出土遺物(27) 剣形の石製模造品で、表面は多方向(上方斜め一縦一下方斜めの順に研磨)の研磨痕が残り、裏面はほぼ一方、上・両側面も

一方の研磨痕が確認できる。穿孔は主に表面から施し、補助的に裏面からも穿孔した痕跡が見られる。緑色片岩製と思われる⁽²⁾。

(3) 飛鳥時代遺構出土遺物【第II-20図】

SB 11320出土遺物(28) 土師器碗の口縁部片である。細片のため全体形状・所属時期は不明である。

SD 11297出土遺物(29~35) 29・30は弥生土器片である。30は意口縁の内面に突帯を持つ内面突帯B類⁽³⁾である。31はサヌカイト剥片で、一部を打ち欠き刃部を作り出している。32は須恵器杯H蓋であり、飛鳥III~IV期⁽⁴⁾と考えられる。33・34は土師器杯でいずれも飛鳥III~IV期と考えられる、34は33に比して焼成が堅緻である。

SB 11110出土遺物(36~40) 36は柱穴8掘方埋土から出土した縄文時代晩期の縄文土器である。37・38は柱穴3掘方埋土からの出土で、37は土師器鉢(碗)で、古墳時代中期、TK 208型式のもの、38の土師器甕は同じく古墳時代中期の所産と考えられる。39・40は柱穴1出土で、いずれも柱抜取穴から出土している。39は古墳時代中期の土師器甕口縁部、40は土師器杯で、斎宮I-1期と考えられる。

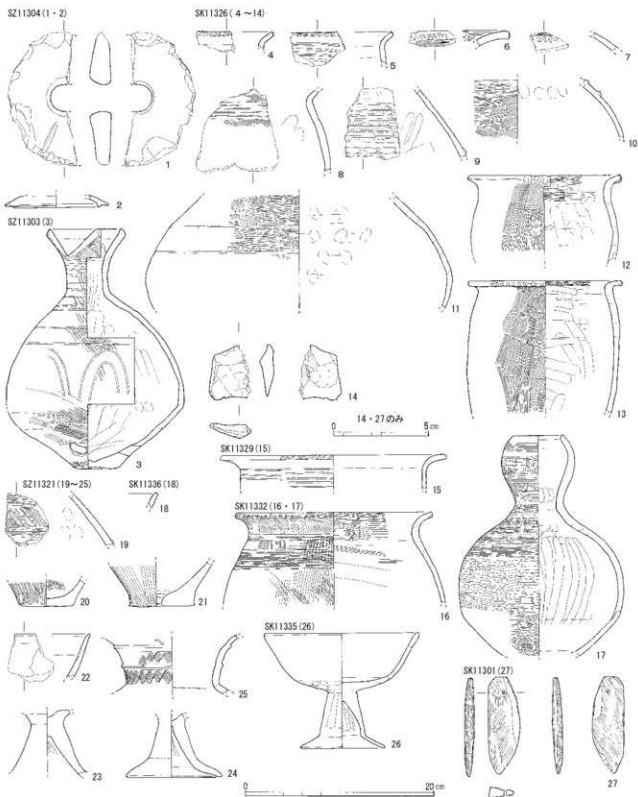
SD 11106出土遺物(41) 弥生時代中期の弥生土器甕口縁部細片である。

SD 11323出土遺物(42~44) 43は土師器高杯脚部で、TK 47~MT 15型式のものと思われる。SI 11321遺物の混入だろうか。44は土師器杯と思われる。口縁部に横方向のミガキが見られ、細片のため判断し辛いのが飛鳥III~IV期か。

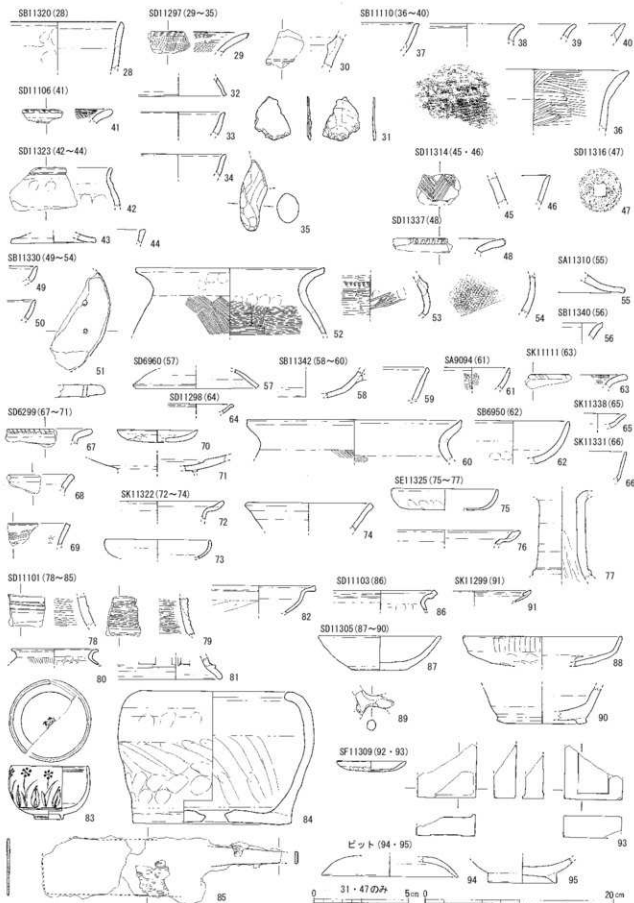
SD 11314出土遺物(45・46) 46は土師器杯の口縁部片である、表面が磨減著しい。斎宮I-1期古段階、飛鳥IV期のものと考えられる。

SB 11330出土遺物(49~54) 49~51は柱穴7掘方、52は柱穴8柱痕跡、53は柱穴9掘方、54は柱痕跡からの出土である。49・50は土師器杯でいずれも飛鳥III~IV期と考えられ、SB 11330構築の上限を示す遺物である。52は土師器甕で、体部径が口縁部径よりやや大きくなる形状であろう。斎宮I-1期、7世紀後葉~8世紀初頭のものである⁽⁵⁾。柱痕跡出土であることから、廃絶時期を示すと考えられる。54は須恵器の甕もしくは甕体部と考えられる。

SA 11310出土遺物(55) 柱穴6掘方出土で、古墳



第Ⅱ-19図 第197次調査 出土遺物実測図1<遺構> (14・27は1:2 その他は1:4)



第Ⅱ-20図 第197次調査 出土遺物実測図2<遺構> (31・47は1:2 その他は1:4)

時代中期の土師器高杯脚部片である。

SB 11340 出土遺物 (56) 柱抜取穴から出土した土師器甕口縁部片で、口縁上端部が肥厚する。7世紀後葉～8世紀初頭の範疇に収まる。

(4) 奈良時代遺構出土遺物【第Ⅱ-20図】

SD 6960 出土遺物 (57) 須恵器杯蓋で、斎宮Ⅰ-1期、飛鳥Ⅴ(平城Ⅰ)期か。

SB 11342・11345 出土遺物 (58～60) 58・59はSB 11342の柱穴4から出土した。58は柱掘方出土で、須恵器無蓋高杯の杯部と思われ、把手の一部が残存する。杯底部外面には直線の線刻が見られるが、これは脚部に施した方形透かしを開ける際についた工具痕と思われる。59は柱抜取穴からの出土で、土師器杯Aの口縁部片である。斎宮Ⅱ-1期の所産と考えられこの建物の廃絶年代の上限を示す。60は柱穴12出土であり、斎宮Ⅰ-2期と考えられる。

SA 9094 出土遺物 (61) 柱掘方出土の土師器杯口縁部である。外面は横方向ミガキ、内面は縦方向ミガキを施す。斎宮Ⅰ-2期と思われる。構築年代の上限を示す。

SB 6950 出土遺物 (62) 柱抜取穴から出土した土師器碗である。斎宮Ⅰ-2期で、廃絶年代の上限を示す。

(5) 平安時代～鎌倉時代遺構出土遺物【第Ⅱ-20図】

SD 11298 出土遺物 (64) 斎宮Ⅱ-3期、9世紀後半代の土師器皿と考えられる。

SK 11338 出土遺物 (65) 土師器杯である。斎宮Ⅱ-3期中段階と思われる。

SK 11331 出土遺物 (66) 須恵器杯Gで、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期である。

SD 6299 出土遺物 (67～71) 70は土師器小皿である。斎宮Ⅲ-3期かと思われる。71は緑釉陶器段皿で、斎宮Ⅱ-3期と考えられる。

SK 11322 出土遺物 (72～74) 72・73は南伊勢系土師器である。72は伊藤編年⁽⁶⁾第一段階、13世紀前～中葉、73は斎宮Ⅳ-3期、13世紀後葉のものである。74は知多産陶器碗⁽⁷⁾で6型式、13世紀後半代のものである。

SE 11325 出土遺物 (75～77) いずれも南伊勢系土師器で、75は斎宮Ⅳ-3期新段階、13世紀後半、76は伊藤編年第2段階、14世紀前半代のものである。

SD 11101 出土遺物 (78～85) 80は土師器甕で古墳時代後期のものか。81は円面碗の脚端部で長方形の透かしを持つ。84は陶器鉢で上半に鉄釉を施す。底部は焼成後穿孔を施され、植木鉢として転用されたものか。85は鉄製包丁である。柄部、刃部ともに木質が付着している。

SD 11305 出土遺物 (87～90) 87はロクロ土師器で斎宮Ⅲ-3期か。88は土師器皿で、口縁部外面に線刻が少なくとも残存部では全体に薄く施される。斎宮Ⅲ-2期。89は不明土製品だが、現段階ではミニチュア甕の蒸気孔部と考える。

SK 11299 出土遺物 (91) 小型の土師器焙烙と思われる。非常に薄く焼成堅緻である。

SK 11309 出土遺物 (92・93) 93は石碇である。全体的に丁寧に研磨されている。

ピット出土遺物 (94・95) 94は土師器杯B蓋である。全体的に摩滅著しく、調整等は不明である。斎宮Ⅰ-2期新段階～3期古段階のものか。95は混美産無釉陶器碗である。12世紀末～13世紀前半のもの。

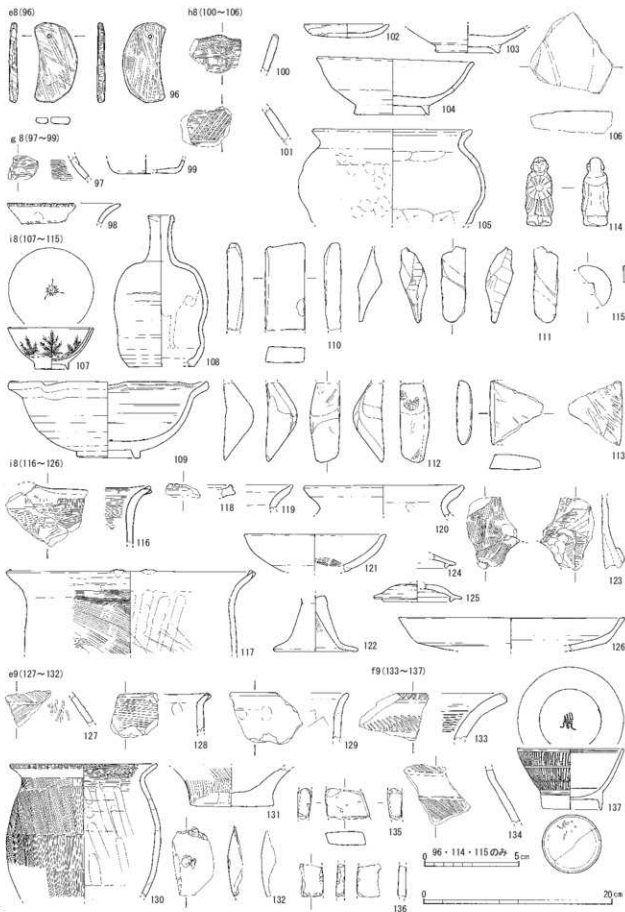
(6) 遺物包含層出土遺物【第Ⅱ-21・22図】

e 8 出土遺物 (96) 勾玉形の石製模造品である。表裏面に研磨による線状痕が残る。側面には、刀子による加工痕の後研磨を行った痕跡があり、内湾部では刀子加工痕が明瞭である。穿孔は片側から行われている。石材調査は行っていないが、蛇紋岩製の可能性がある。5世紀後葉の所産か。

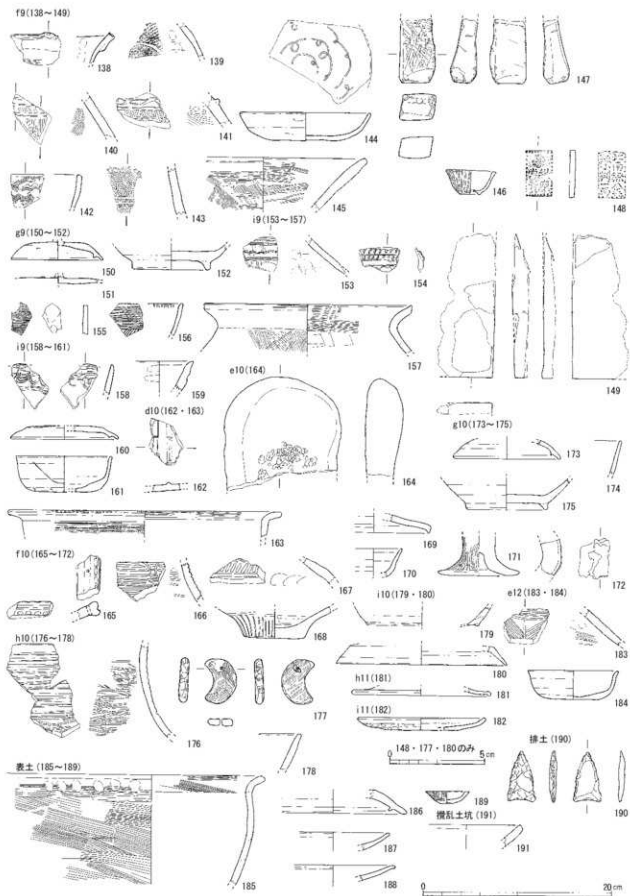
g 8 出土遺物 (97～99) 99は須恵器杯G底部である。斎宮Ⅰ-1期、飛鳥Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。

h 8 出土遺物 (100～106) 100は弥生土器甕で、口縁部は突起し、口縁端部にキザミを施し、外面にはハケ後凹線を施す。102は土師器小皿、103・104はロクロ土師器碗で斎宮Ⅲ-2期、11世紀中葉。105は土師器鍋で13世紀代と平安時代後半から末の資料である。102～105は一括で出土したもので、この地点に当該時期の遺構がある可能性があるが、遺構が多く重複し不明である。

i 8 出土遺物 (107～115) 107は肥前系磁器で19世紀前半のもの、109は瀬戸産の陶器鉢で類似するものがSK 11315から出土している。110～113は砥石である。113は瓦質で、瓦を砥石に転用したものである。114は地蔵形のどろめんこ、115の銭貨は



第Ⅱ-21図 第197次調査 出土遺物実測図3<包含層> (96・114・115は1:2 その他は1:4)



第Ⅱ-22図 第197次調査 出土遺物実測図4<包含層その他> (148・177・180は1:2 その他は1:4)

脆弱で表面が剥離しており、種類は不明である。

j 8 出土遺物 (116~126) 116・118は弥生土器甕で、どちらも口縁部に突起を持つ。119・120は土師器甕で甬宮Ⅰ-1期相当⁹⁾、121は椀形高杯の杯部で辻編年第4段階TK 208~47型式、123は土師器移動式カマドで、下半に突起を持つが、甬宮跡第86次調査に類似するものがあり、甬宮Ⅱ-1期古段階の遺物が相伴する¹⁰⁾。124・125は須恵器杯G蓋で飛鳥Ⅲ~Ⅳ期である。126の須恵器皿Aは焼成不良で軟質である。甬宮Ⅰ-2期か。

e 9 出土遺物 (127~132) 128は弥生土器甕で口縁端部に突起を持つ。130の弥生土器甕は口縁端部にキザミを施す。

f 9 出土遺物 (133~149) f 9には多量の陶磁器が出土したS K 11315や弥生土器が出土したS K 11326があるため、弥生土器、近世遺物が多い。

137は肥前系磁器の広東碗である。見込みに染付で「壽」とある。また、ガラス質の焼き継ぎが施され、高台部には発注元を示すと思われる印が焼き継ぎに用いたガラス質で施される。138は縄文土器浅鉢と思われる。胎土は緻密で表面は一部ミガキで丁寧に仕上げられている。中期のものと思われる、他地域からの搬入品と見られる。142は弥生土器小型鉢である。表面に櫛描による波状文を施す。143は須恵器器台片と思われ、硬質な焼きである。144は土師器杯で甬宮Ⅰ-3期である。145は土師器盤で平城Ⅱ期のもと思われる。146は磁器紅皿である。今回の調査では紅皿が複数点出土しているが、いずれも189のような浅いものであり、深いものは146のみである。148は南鐘二朱銀を模した土製品である。二朱銀は「銀座常足」「以南鐘八片換 小判一兩」と刻むが、本作は異体字を使用する。149は石礎である。残存部が少ないが、表裏面とも硯面として使用していたようである。

i 9 出土遺物 (153~157) 154は弥生土器手焙形土器。155は弥生土器鉢の破片と思われる。156は古墳時代前期の瓢壺で口縁端部に表面と上部からキザミを、表面に櫛描直線文を施す。表面を赤彩する。

j 9 出土遺物 (158~161) 158は弥生土器小型壺片である。口縁部は弧状を呈し、内外面に櫛描文を施す。159は土師器椀である。外面に強いユビナデの

痕跡が見られる。古墳時代中期のものか。160は須恵器杯G蓋で、飛鳥Ⅲ~Ⅳ期の所産である。161は外面にヘラ描きが見られる。

d 10 出土遺物 (162・163) 162は弥生土器壺口縁部で、内面に突帯とその内側に凹線が1条、突帯の反対側、外面に凹線が一条施される。

f 10 出土遺物 (165~172) 165は弥生土器甕である。口縁部に直径0.2cm程の紐孔が開く。171は土師器高杯脚部で、飛鳥Ⅲ~Ⅳ期と考えられる。

g 10 出土遺物 (173~175) 173は須恵器杯蓋で飛鳥Ⅲ期、174は須恵器杯Gである。

h 10 出土遺物 (176~178) 176は弥生土器壺頸部片である。内外面ともミガキを施し、外面には凹線を施す。177は勾玉形石製模造品である。表裏面とも研磨痕が確認できる。側面は刀子による加工痕が明瞭である。また、孔は裏面、図の下面から穿孔する(片側穿孔)。表面は穿孔により孔の周囲が剥離する。使用石材は調査を行っていないが、絹雲母岩、滑石片岩、もしくはシルト岩と指摘される。178は土師器杯片で甬宮Ⅰ-2期である。

i 10 出土遺物 (179・180) 179は土師器有稜(有段)高杯杯部で辻編年4段階、TK 208~47型式と思われる。180は須恵器杯蓋で飛鳥Ⅲ~Ⅳ期か。

(7) その他

表土出土遺物 (185~189) 表土からの遺物はさほど多くない。185は弥生土器甕で、表面に煤が多く付着する。186は須恵器杯蓋で、飛鳥Ⅲ期である。187・188は緑釉陶器皿である。189は磁器紅皿である。

排土遺物 (190) 調査にあたっては、表土掘削土と包含層掘削土は調査区の西と東に分けて残置しており、190は包含層掘削土から出土したものである。石緻で、サスカイト製と思われる。全体に風化著しい。

攪乱土坑出土遺物 (191) e 10の攪乱土坑から出土した弥生土器壺口縁部で、前期の所産である。

5 まとめ

(1) 古墳時代石製模造品

今回の調査では、甬宮跡としては初めて石製模造品が、しかも3点出土した。既にみたように、7世紀以降の遺構が集中するにも関わらず3点もの石製

模造品が出土することから、周辺ではより多くの模造品が使用されていた可能性も考えられる。

今回出土した石製模造品はその特徴から、5世紀中葉～6世紀初頭、古墳時代中後期のものと考えられる。この時期の遺構は第193次調査では確認されていないが、第197次調査ではS I 11321のほか土坑2基があり、S K 11335からは土師器高杯(26)が、S K 11301では剣形石製模造品(27)が出土している。遺物は第193次調査で包含層から土師器高杯が2点、第197次調査でも包含層から土師器高杯が図化したのは2点、図化していないが、脚部破片が10数個体分出土しており、特にS K 11301のあるi 9区で多いようである。それに対し、カマドを伴うS I 11321があるものの、供膳具である杯類や、貯蔵具や煮炊具は少数である。

斎宮周辺地域の石製模造品について集成・検討がなされていないため、斎宮跡におけるその意義について検討を加えることはできない。そこで既に指摘されている土師器高杯の重要性を再掲する。近辺、斎宮跡の西に位置する松阪市中の坊遺跡では4世紀後葉頃の竪穴建物から土師器高杯が、宮川下流域の伊勢市高ノ御前遺跡では5世紀後葉の竪穴建物から土師器高杯が多く出土することから、土師器高杯の出土は祭祀の執行を現す可能性がある。斎宮段丘低縁部ではそれに石製模造品を合わせた祭祀が想起され、「視点場として眺望はよく、視認性にも優れ、祭祀空間であった公算が高い⁽⁹⁾」という指摘を否定する要素は、今回の調査では見当たらない。

(2) 飛鳥時代中樞域の構造

四脚門、脇殿相当の長舎の建物、その西側で確認した溝の存在は、飛鳥時代区画の構造を明らかにするとともに、新たな課題も浮かび上がらせた。今回の調査で得られた遺構の状況を整理する。

① 飛鳥時代遺構の変遷(第II-23図)

門・掘立柱建物に2段階あることから、各段階の遺構について整理する。

第1段階：掘立柱建物を竊とする段階

第193次調査で検出した区画北辺界S A 11120の最も東の柱穴は柱穴の重複がなく、東から2つ目から西は重複がある。また、東から2つ目の柱はS B 11110の東側柱・S B 11320の中央柱と筋が通ること

から、北辺はS A 11120を区画界として、東辺はS B 11110・11329を区画施設とした。S A 11120とS B 11110の間には空間が空き、柱と考えられるようなピットがあるが、柱間も均等ではなく、確定はできない。

南の建物S B 11329は布張り、S B 11110は壺掘りと工法が異なり、柱筋も東へ0.4mずれるが、S B 11329は第1段階の建物とする。

第2段階：東側に掘立柱塼を新築する段階

S A 11120を1間分(約2.5m)東へ拡張し、そこから南へ延びるS A 11310が造られ、門S B 11330が取り付く段階である。S B 11110は建替えが見られないが、この段階も存続したと仮定する。

S B 11340はS B 11339から北に0.9m、西に0.2mずれて建てられる。S B 11330からの距離はS B 11110と対称とはならず、区画が2.5m東へ拡張されたことにより、北へ建物がずれたとしても屋根が干渉しない。また、第1段階よりもS B 11110とS B 11340の東側柱筋は揃う。

以上は、門と掘立柱建物の建替えから考えられる区分である。平成30年度に実施した第195次調査では4段階に分けられる倉庫群を確認したが、今回の方形区画の変遷と倉庫群との対応関係については今後の課題としたい。なお、S B 11320の北側柱筋には重複するS D 11297があり、第1段階よりも古い段階があるが、他の建物などどのように対応するか判断できない。

今回、区画の中心となる正殿相当の建物の柱穴等は確認できなかったが、四脚門を確認したことから、門からの導線を辿る建物は建っていないかと推定する。中心建物は四脚門より北、S B 11110西側にある可能性を指摘するに留める。

② 掘立柱建物に併行する溝

S B 11110・11339・11340西側の溝、S D 11107・11323・11324を検討するため、調査所見を整理する。

3本の溝の共通点は以下の通りである。

- ・溝の両端はなだらかに傾斜する。
- ・溝の横断面形は、箱状もしくは底近くがわずかに広がる袋状を呈し、溝壁面は整形しない。
- ・溝埋土は黒色土であり、地山を深く掘削しているにもかかわらず、地山ブロックは含まれない。

・溝がしばらく開いていたもしくは滞水状況を示すような土の堆積状況は確認できない。

・柱痕跡が確認できる部分の柱間は約2.5mである。異なる点として、

・縦断面形は、北のSD11107は、柱痕跡部のみ深くなり、柱間部は立ち上がる形状であるが、南のSD11323・11338は、溝端から底に下がった後、一定の深さを保つ。

以上から言えることは、これらの溝は、しばらく開渠の状態もしくは滞水状況にはない。また、北の溝と南の溝では、縦断面形以外の他の要素は共通することから、縦断面形の相違は溝の用途の違いを表すのではなく、工法の違いによるものと言えるのではない。少なくとも、柱を立てる目的のために掘られた溝であり、掘立柱建物に並行することから、どのような構造のものであったかは別として、塼としての役割を有する可能性を強く推す。

なお、SB11320の北側柱筋が重複するSD11297も、SD11323・11338と溝の形状・埋土の特徴が共通する。しかしながらこの溝は、飛鳥時代遺構の第1段階であるSB11320よりも古いことから、SD11323・11338とは類似するもののその用途については不明と言わざるを得ない。

③ 白色粘土の存在

飛鳥・奈良時代の遺構からは特徴的な白色粘土を確認した。包含層掘削時に白色粘土が確認できた部分で土層断面ベルトを残して観察したところ、包含層である黒色土上から飛鳥・奈良時代の柱抜取穴等に入ることを確認した(第II-15図)。

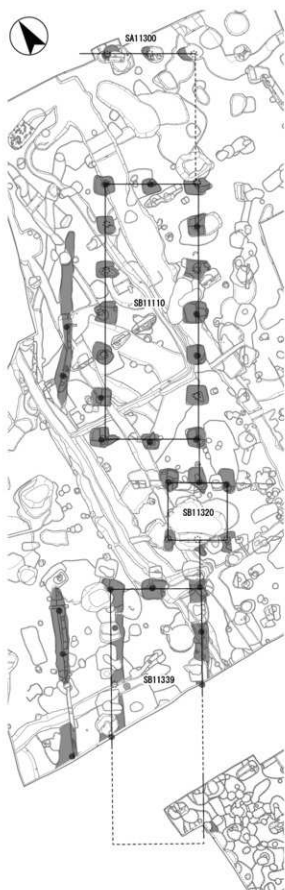
白色粘土が見られる遺構について整理をすると、白色粘土は飛鳥時代第1段階の柱抜取穴に混入するが柱掘方には入らない。そして、第2段階の柱掘方に白色粘土はブロック状に入り、柱抜取穴にも入る。奈良時代の遺構では、調査区北部で確認したSB11342・11345では柱掘方にも柱抜取穴にも白色粘土が充填される。調査区南部の奈良時代掘立柱塼群やSB6950では柱抜取穴にも入る。また、掘立柱塼に並行するSD6950の埋土上層にも確認できる。

以上の状況から、白色粘土は飛鳥時代第1段階の遺構の腐絶段階には存在する。この白色粘土は包含層や周辺の調査区土層断面では確認できず、飛鳥時

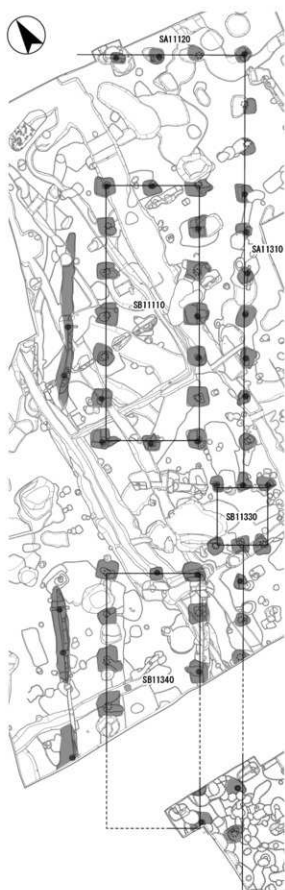
代SB11110柱穴2抜取穴や奈良時代SB6950柱抜取穴に見られる円礫も含め、人為的に持ち込まれた可能性があることを指摘するに留め、この性格については今後の課題としたい。

註

- (1) 辻美紀1999「古墳時代の中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室
- (2) 石製模造品については、椎原祐一氏に寄宮跡出土品を見ていただき、ご教示いただいた。
- (3) 川部浩司2014「内面突帯の出現と展開—前期弥生土器にみる貼付突帯要素の源流と地域性—」(弥生土器研究フォーラム2014『弥生土器研究の可能性を探る2』)
- (4) 西弘南1978「B 土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- (5) 寄宮跡から直線距離で約3kmに位置する松阪市天王山遺跡SK303出土の土師器壺571が類似するが、この土坑から出土する土師器壺が飛鳥Ⅴ(平城Ⅰ)期、寄宮Ⅰ-1期と考えられている。三重県埋蔵文化財センター2006『天王山遺跡・天王山古墳群発掘調査報告』
- (6) 伊藤裕像1996「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」(第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕のデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会)
- (7) 山下峰司1995「4. 灰輪陶器・山茶碗」(中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真臨社)
- (8) 天王山遺跡SE306から類似の土師器壺が出土している。
- (9) 「II 第86次調査」『史跡寄宮跡平成2年度発掘調査概報』1991 寄宮歴史博物館
- (10) 土師器高杯の出土が優位である点や中の坊遺跡・高ノ御前遺跡との共通性について指摘される。川部浩司2020「[論考1]考古学からみた伊勢神宮と寄宮の成立過程」『寄宮と古代国家』展示図録 寄宮歴史博物館



第1段階



第2段階

第Ⅱ-23図 飛鳥時代の遺構変遷図(1:200)





調査区遠景（北東上空から）

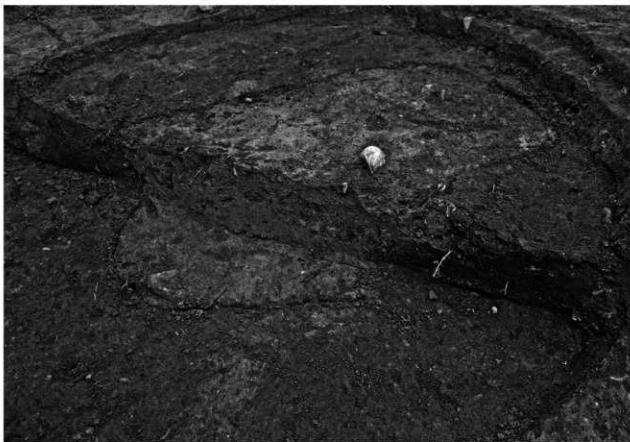


調査区全景（上空から）

写真図版 2



SA11310 (北東から)



SB11110 柱穴 2 柱採取穴検出状況 (南西から)



SD11107 (南西から)



SD11323 (北東から)



SD11107 柱穴2断面 (東から)



SD11323 断面 (南から)

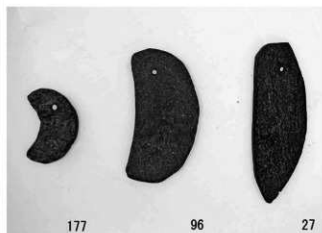


SD11297・SB11320 柱穴断面 (南西から)



調査区南東部 奈良時代掘立柱塼 (東から)

写真図版 4



第 197 次調査出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきさいくうあと せいむがんねんどうはくつちようきがいほう							
書名	史跡斎宮跡 令和元年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山中由紀子							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2021年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいくうあと 斎宮跡	たきぐんめいわちよ 多気郡明和町 さいくう たけがわ 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ～ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ～ 136° 37′ 37″	20190902 ～ 20200323	425.8㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
斎宮跡 第197次	官衙	弥生・古墳・ 飛鳥・奈良・ 鎌倉・江戸		方形周溝墓・ 堅穴建物・ 掘立柱建物・ 掘立柱礎・ 門・溝・土坑		弥生土器・土師器・須恵 器・陶磁器・土製品・石 製品・金属製品・瓦		飛鳥時代の方形 区画北東部
要約	<p>飛鳥時代の斎宮中根域での発掘調査において、掘立柱礎で構成される方形区画と区画施設に付随する門を確認した。方形区画を構成する掘立柱礎に付随する門は1回の建替え、南側掘立柱建物は1回の建替えを認めるが、こうした空間整備の変遷は平成30年度に第195次調査で確認した倉院の変遷と連動し、区画の構造を考える上で重要な成果を提示したといえる。</p>							

史跡 齋宮跡

令和元年度

発掘調査概報

2021年3月26日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 有限会社ミフジ印刷
